https://www.daitoken.com/ ISSN:0286-6854

大学の図書館

第43巻第12号（No.613）

2024 12

大学図書館研究会第55回全国大会記録

2024年9月21日（土）－ 22日（日・祝）
（オンライン（Zoom）開催）

目次

第55回全国大会のまとめとして …… 192
会員総会議事録 …… 194
研究発表・事例報告 …… 211
課題別分科会 …… 216
（1）資料保存　（4）大学図書館史
（2）学術情報基盤　（5）出版・流通
（3）キャリア形成　（6）利用者支援
シンポジウム「学生協働の現在」 …… 226
ウェルカムガイダンス …… 228
協賛企業プレゼンテーション …… 228
自主企画 …… 229
協賛企業・団体一覧 …… 231
会員総会資料 …… 232
決算報告 …… 259
大会参加申込者名簿 …… 261
大会運営役員名簿 …… 262
配付資料 …… 263

議事要録 …… 264

第55回全国大会のまとめとして

常任委員会

第55回大学図書館研究会全国大会は、2024年9月21日（土）から9月22日（日･祝）の2日間、オンライン会議システムZoomを用いたオンライン形式にて開催されました。参加者は104名となり、盛況のうちに終了しました。

前回に引き続き、実行委員会形式での運営となりましたが、全国大会実行委員長の加藤晃一さん、副実行委員長の赤澤久弥さん、全国大会実行委員会の皆さまには大変お世話になりました。

今回は、1日目午前に会員総会、午後に研究発表・事例報告、3つの課題別分科会及び交流会、2日目午前に3つの課題別分科会、午後にシンポジウムを開催しました。また、自主企画を2日目終了後に1件開催しました。

会員総会は、第54期（2023/2024年度）の活動報告・決算報告・会計監査報告について報告があり、審議の結果承認されました。続けて、第55期（2024/2025年度）の活動計画案・予算案・役員案について審議され、承認されました。会員総会には、46名の参加がありました。

今回から、研究発表は事例報告も含むこととし、2件の発表がありました。1件目は、間嶋沙知さん（majima DESIGN）、岡本真さん（アカデミック・リソース・ガイド株式会社）による「図書館の実空間とデジタル資源の接点をデザインする」が、2件目に、徳田恵里さん（近畿大学短期大学部商経科司書課程非常勤講師）、篠原圭介さん（丸善雄松堂株式会社（近畿大学ビブリオシアター勤務））による「『Book: The Gathering』: 知の劇場で謎を解く、近畿大学ビブリオシアター発のプロジェクト」の発表があり、活発な質疑応答が行われました。研究発表・事例報告には65名の参加がありました。

また、初めて大学図書館研究会の全国大会に参加される方向けに、「ウェルカムガイダンス」を2回開催し、第1回は大会1日目の9月21日9:30から、第2回は大会2日目の9:30から開催し、1回目は16名、2回目は17名、計33名の参加がありました。

1日目の研究発表・事例報告の後と、2日目の午前に、それぞれ課題別分科会が開催され、1日目は、資料保存、学術情報基盤キャリア形成の3つ、2日目は、大学図書館史、、出版・流通、利用者支援の3つ、計6つの分科会を開催しました。会員が講師を務めたり、参加者同士で活発な議論が行われたりするなど、主体的な参加が目立ちました。

1日目終了後にオンラインでの交流会が開催されました。34名の参加があり、会長・副会長･事務局長のあいさつのほか､各グループや無所属会員からの簡単な近況報告があり、参加者間の交流を深めることができました。

2日目のお昼休み中に、協賛企業プレゼンテーションが開催され、44名の参加がありました。EBSCO Information Services Japan株式会社さまより「最新シングルサインオン－ OpenAthens －」を、またiJapan株式会社さまより「電子ジャーナル契約のためのエクチェンジャー：Unsubとその利活用のためのコンサルテーション」のご発表があり、さまざまな質疑応答がありました。

2日目午後のシンポジウムは、「学生協働の現在」が開催されました。郡山女子大学短期大学部地域創成学科の和知剛さんによる司会で、前半は、標題に係る皇學館大學附属図書館の井上真美さん、山梨英和大学附属図書

館の青柳有紗さん、和知さん（郡山女子大学図書館）からの詳細な事例補告を、また後半のパネルディスカッションでは、フロアや登壇者間の質疑や議論が活発に行われ、大学図書館の在り方を考える場となりました。参加者は57名でした。

自主企画は、2日目シンポジウムの後に「図書館こぼれ話。見てたドラマに図書館が出てきた！」が開催されました。昨今のテレビドラマに出てきた図書館について簡単な考察をしたもので、千葉大学附属図書館の加藤晃一さんのご説明がありました。自主企画には37名の参加者がありました。

今回は、協賛くださった企業さまから情報提供を受け、イベント待機時間中に放映するスライドを掲載し、協賛企業の商品やサービスをレビューできる場を提供しました。

その他、会報を使った協賛企業の広報や、協賛企業の大会招待を通じて、図書館関係者に限らない幅広い交流の場を作ることができました。

さいごになりましたが、今回の全国大会開催にあたっては、EBSCO Information Services Japan株式会社、iJpapan株式会社、NPO医学中央雑誌刊行会、株式会社カーリル、株式会社カルチャー・ジャパン、株式会社紀伊國屋書店、株式会社規文堂、株式会社サンメディア、株式会社シー・エム・エス、株式会社樹村房、株式会社タック・ポート、株式会社ネットアドバンス、日外アソシエーツ株式会社、日本事務器株式会社、日本ファイリング株式会社、丸善雄松堂株式会社、ユサコ株式会社（五十音順）の各社様にご協賛いただきました。大学図書館研究会の研究活動をお支え下さり、心より御礼申し上げます。

来年の全国大会の開催形態は検討中ですが、また、みなさまにお会いできることを楽しみにしております。

会員総会議事録

2024年9月21日（土）　10:00-11:45

出席者：会長、副会長、事務局長含め、
会員46名（最大）

決定事項：

・第1号議案「2023/2024年度活動報告」は、原案どおり承認された。
・第2号議案「2023/2024年度決算及び監査報告」は、原案どおり承認された。
・第3号議案「2024/2025年度活動計画案」は、原案どおり承認された。
・第4号議案「2024/2025年度予算案」は、大会基金や出版財政を一般財政に統合するなどの変更が提案され、誤記を修正した上で、原案どおり承認された。
・第5号議案「2024/2025年役員案」は、原案どおり承認され、会員総会当日に開催された、2024/2025年第1回全国委員会において、互選により会長に楫幸子（かじ・さちこ）氏が選任された。

議事：

上村（事務局長）

大学図書館研究会第55回全国大会を開会いたします。進行は暫時、事務局長の上村順一が務めます。どうぞよろしくお願いいたします。

この会員総会は記録のために録画をしております。あくまで記録のためですので公開はいたしません。この会員総会で用いる資料は、会員総会資料PDF、及び第5号議案の2つのPDFになります。資料は適宜、画面共有もいたします。

それでは開会に際し、大学図書館研究会会長の呑海沙織よりご挨拶申し上げます。

呑海（会長）

大学図書館研究会会長の呑海です。今年の会員総会もオンラインで実施されることになりまして、こうして画面越しではありますけれども、みなさんとお会いすることができました。ありがとうございます。これまでご準備くださった加藤全国大会実行委員長、赤沢副大会実行委員長、上村事務局長をはじめ、全国大会実行委員の皆様と準備に携わってくださった皆様に御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。ご準備大変だったと思います。

そしてまた今年も大変ありがたいことに、17の企業や団体様からご協賛をいただいておりますので、ここで改めて御礼申し上げておきたいと思います。

今日明日ご参加の皆様におかれましては、よろしくお願いいたします。大図研は、予稿集のはじめの「ご挨拶」のところにも書かせていただいたのですが、ここ数年、名称変更、研究グループの枠組み作り、出版物のデジタル頒布と、様々な変化を経てきました。今日の会員総会でも、大図研の運営についてディスカッションしたいと思いますので、ぜひみなさんにご発言いただければと思います。

こういった環境が大きく変わる中で、ライトな活動も、そのあり方も含めて変わっていくと思いますけれども、このような活動が長く続けていけるようにするためには、私たち一人一人が当事者意識を持つことが大事だな、とつくづく思っているところです。

では、これから始まる全国大会の2日間、肩の力を抜いて、お互いにコミュニケーションを楽しみつつ。一人一人が何かを持ち帰ることができる大会になればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

上村（事務局長）

ありがとうございました。それでは会員総会を開催いたします。

12時に終了を予定しております。途中で一回10分から15分程度の休憩が入ります。この休憩の間に、今年度第1回全国委員会を開催いたしますので、全国委員の皆様はご参集くださいますようお願いいたします。会員総会は大学図書館研究会会則第11条に基づき、会長が招集し開催されるものです。また、会員総会では同会則第8条第3項により活動方針、予算決算、役員の選出およびその他必要事項を審議し決定しますと規定されています。

会員総会については、会員のみ参加可能な行事ですので、恐れ入りますが非会員の方はご退室をお願いいたします。

議案は現時点で5つございます。第1号議案として2023/2024年度活動報告、第2号議案として2023/2024年決算及び監査報告、第3号議案として2024/2025年度活動計画案、第4号議案として2024/2025年度予算案、第5号議案として2024/2025年役員案、となっております。

会員総会の開催にあたって議長を選出いたします。議長に立候補される方がおられましたらば、挙手、あるいはチャット書き込み、もしくはご発言をお願いいたします。

立候補される方がいらっしゃいませんでしたので、事務局よりお2人をご推薦申し上げます。

東京地域グループの小野亘さん、九州地域グループの金子芙弥さん、このお2人をご推薦申し上げます。このお2人の議長をご承認くださる方は、挙手ないし、何らかの意思表示をしてくださいますようお願いします。

賛成多数と認め、ご承認されたものとして進めさせていただきます。

それでは、小野さん、金子さん、会員総会の進行をお願いいたします。

小野（議長）

先ほどご推薦をお認めいただきました、東京地域グループの小野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

金子（議長）

同じく議長を務めます、九州地域グループの金子と申します。よろしくお願い申し上げます。

小野（議長）

記録および参加者名簿の扱いについてご連絡いたします。全部で4点ございます。

SNSへの投稿は議論に集中願いたいため、総会開催中は投稿禁止といたします。閉会後は、議案によっては支障ありません。

会員総会での審議内容は質疑応答を含め、会報『大学の図書館』2024年12月号の大会記録後に掲載されます。また、大学図書館研究会のウェブページにも掲載されることもありますので、よろしくお願いします。

いわゆるオフレコ情報や匿名希望の場合には、ご発言の際にご表明ください。掲載を配慮させていただきます。

質疑応答については、各議案の最後にまとめて受け付けます。ご発言は氏名と差し支えなければご所属をお願いします。その上で要点を簡潔にまとめていただくようにお願いをいたします。

第1号議案の審議に移ります。

第1号議案「2023/2024年度活動報告」です。質疑については審議最後にまとめて承りますのでご了承ください。2023/2024年度の活動日誌について補足説明等ございましたら、事務局よりお願いいたします。

上村（事務局）

事務局の上村でございます。特段の補足はございません。

小野（議長）

ありがとうございました。

引き続き会員総会資料3ページのグループ報告をご覧ください。地域グループおよび研究グループから昨年度の活動について補足説明がございましたらお願いいたします。発言するときはグループ名とお名前をお願いします。

グループからの補足はありませんでしたので、次に常任委員会の活動報告に移りたいと思います。会員総会資料の16ページです。常任委員会は、全国大会、研究企画、会報編集、会誌編集、広報の5つの委員会がございます。五十周年記念事業関連委員会として、記念出版編集委員会もございます。各委員長から昨年度の活動について、補足説明等ございましたら、これも発言ございましたら挙手をお願いいたします。ご発言いただく前に委員会名とお名前お願いいたします。

各委員長からの補足はありませんでしたので、最後に事務局から事務局の活動報告をお願いいたします。

上村（事務局長）

総会資料の9ページをご覧ください。

昨年度の事務局は、事務局本体と事務局に内包する形で出版、会費徴収、会計、組織等に分けて事務処理を行ってまいりました。ここ数年、同様の体制で事務を遂行しております。

特筆すべき点としては、事務局出版担当のところで、アウトソーシングを行いました点です。今のところ特段の問題もなく、順調に業務ができております。このアウトソーシングについては、事務局出版担当の、前のご担当の東京地域グループの市村さんの不断の努力によって成し遂げられたものでございます。今日は市村さんこちらにいらっしゃいませんけれども、特に感謝の意を表したいと思っております。

また当初の計画にはございませんでしたけれども、会員に対して会員情報調査、かつては悉皆調査と称しておりましたが、それを5年ぶりに行いました。いきなりでしたが、皆様にこころよくご回答いただきました。おかげさまで会員名簿が大変綺麗になりました。深く感謝申しあげます。いまだ未回答だという方、もしいらっしゃいましたらば、ご回答よろしくお願い申し上げます。

小野（議長）

ありがとうございました。

以上が第1号議案になります。では第1号議案について、ここからご質問をお受けしたいと思います。ご発言の際は挙手、もしくはチャットの書き込みをお願いいたします。議長が指名しましたら、お指名とお差し支えなければ所属をお願いいたします。まあ、その後要点は簡潔にお願いをいたします。

野村（東京地域グループ）

地域グループの活動のところで北海道でしたか「5分プレゼン」と書いてあって、ちょっと面白そうだなと思ったのですが、差し支えなければ、どのようなものなのか教えていただければと思います。

小林（北海道地域グループ）

北海道地域グループ全国委員の小林です。

「5分プレゼン」というのは、北海道は広いので会って話す機会があまりないということがあり、例会の時に近況報告をしようということになりました。5分プレゼンということで、プレゼン資料をしっかりで作って、自分がこの数ヶ月で仕事に関する何か興味のあることとかをきちんとプレゼンしてもいいし、ただの近況報告でもいいし、一人で持ち時間5分間で。

その後みんなで質問したりする時間を設けて、大変活気づいて例会が楽しくなったと評

判です。皆様にもおすすめします。

小野（議長）
ありがとうございました。
それでは、第1号議案を採決いたします。採決はZoomの投票機能を用いて行われます。画面に賛成、反対、保留が示されますので、第1号議案への投票をお願いいたします。

賛成が39票、反対が0票、保留が0票で、賛成多数です。第1号原案は承認されました。

金子（議長）
続きまして第2号議案、「第54期2023/2024年度決算報告・会計監査報告」に入ります。質疑については、本審議最後にまとめて承りますのでご了承ください。会員総会資料21ページをお開きください。2023/2024年度の決算報告について、事務局から説明をお願いします。

上村（事務局）
2023/2024年度の決算報告案について、一般財政、大会基金、出版財政、五十周年記念基金の順にご説明申し上げます。
一般財政の収入では今回、昨年度は残念ながら会費納入額が予算額を下回っております。対して、全国大会（大阪大会）が大変盛況でございまして、黒字分がございましたので、その分の収入がございます。全体としては若干の赤字決算ということになりました。
続けて一般財政の支出でございます。新型コロナ禍対策として通信費を多めに、また、新型コロナ禍明けというところもございますので、オンサイトの会議を開催するということで、交通費を多めに立てておりましたけれども、いずれもそれほどの執行額には至りませんでした。また会議費や事務管理費、消耗品等の事務遂行にかかる費用は、経費削減、縮減に努めて最小限で済んだかなと考えております。この会の中心である研究活動費ですが、ここがいまだ新型コロナ禍の影響がまだあるのかなというところで、未執行が多い状況になっております。
続けて大会基金は、ここ数年、適切な執行かつ、全国大会の実行委員の皆様の多大なご努力で、予算を上回る収入をいただいているところでございます。大会基金は、100万円を超えた部分は一般財政に繰り入れるという決まりになっております。大会基金以上に収入があるという状況でございまして、特に大阪大会、前回の全国大会の実行委員会の皆様のご尽力に感謝を申し上げたいところでございます。
続けて出版財政は、収入のところ、若干収入が減ってしまったところが残念なところです。また、支出も適切な執行に務めたつもりでございます。
最後、五十周年記念事業については、今回予算執行を伴う活動がございませんでしたので、予算額と決算額が同額ということになっております。以上ご報告申し上げます。

金子（議長）
次に、会計監査結果について所見を会計監査からお願いいたします。会員総会資料26ページを開いてください。

伊賀（会計監査）
会計監査担当の伊賀です。2023年/2024年度の会計監査結果についてご報告いたします。2023年/2024年度の会計監査については、領収書等の証憑を、書類も含めて資料はすべてオンラインにより事前にご提示いただきまして、もう1名の会計監査人の立原さんとともに確認作業を行いました。
その結果、資料に記載のあるとおり、いくつか今後に向けての課題として挙げさせてはいただいておりますが。会計処理についてはいずれも適正に執行されていることを確認し

ましたので、ここにご報告をさせていただきます。

金子（議長）
　ありがとうございました。
　以上が第2号議案です。第2号議案についてご質問をお受けいたします。ご発言の際は挙手、もしくはチャットへの確認をお願いいたします。議長が指名しましたら、氏名と差し支えなければご所属を、要点を簡潔にまとめて発言をお願いいたします。

　ご質問が無いようですので、第2号議案を採決いたします。採決はズームの投票機能を用います。画面に賛成、反対保留が表示されますので、本議案への投票をお願いいたします。

　皆様の画面上に賛成100%と出ておりますが、賛成が39票、反対0票、保留0票ということで、賛成多数となりましたので、第2号議案は承認されました。

　本来、次に3号議案となっておりますけれども、進行の都合で、先に第5号議案「第55期2024/2025年度役員案」の審議をさせていただきます。役員案のPDFをお持ちになるか、画面共有をしておりますのでご覧ください。2024/2025年度の役員案について、会長の方からご説明お願いいたします。

呑海（会長）
　全国委員は基本的に各地域グループから、また長期的研究グループからご推薦をお願いしているところです。会員種別のところを見ていただくと確認していただくことができます。また会則の第9条で通常の会務を担当する常任委員を設けることになっておりますが、今年度はご覧のとおり、ここにお示ししている会員種別のところで常任あるいは「(特定常任)」と表示されている方が候補者となっております。
　全国委員の交代等については事務局長からお願いできますでしょうか。

上村（事務局長）
　地域グループおよび研究グループ推薦の全国委員では、3名の交代がございます。
　北海道地域グループで小林さんから中筋知恵さんに交代します。京都地域グループでは、山上さんから長坂和成さんに交代します。中筋さんは昨年度まで常任委員でしたが、今年度からはグループ推薦の全国委員となります。
　恐れ入りますが、交代された方々から一言お言葉頂戴したいと思います。

小林（北海道地域グループ）
　北海道地域グループの小林です。2年間、全国委員としてお世話になりました。特に全国委員の仕事で、全国大会の準備が大きいのですが、全国の皆さんとオンラインで情報やり取りしながら準備をする作業はとても楽しく、また勉強になりました。

山上（京都地域グループ）
　この度、京都地区グループの全国委員を交代させていただくことになりました山上と申します。2年間勤めさせていただきました。普段の業務とはまた違った経験、特にやはり全国大会の経験、大変勉強になりました。全国委員は交代することになりましたが、京都地球グループの地域グループ長に就任することになりますので、また京都地域グループのワンデイセミナーでお会いできればと思います。

中筋（北海道地域グループ）
　北海道地域グループの中筋です。この度、全国委員として、7、8年ぐらい前にやらせ

ていただいたのですが、再び全国委員としてやらせていただくことになりました。皆様方と交流ができることを改めて楽しみに思っています。よろしくお願いいたします。

上村（事務局長）
　ありがとうございました。
　続けて常任に参ります。常任委員はご退任が2名、新任が2名でございます。
　ご退任は北川さんと小山さん、ご新任は大田原さんと松原さんでございます。新人の方々はいずれも特定の業務を務める「特定常任」としてご就任の予定でございます。会計監査はお2人とも今回ご継続のお願いをすることになっております。
　それでは、常任委員をご退任の方から一言、お言葉を頂戴したいと思います。

北川（常任委員）
　北川でございます。お世話になっております。常任委員に会員総会で選出していただきまして、昨年も会員総会の後、今年度どういったことをやろうかと自分なりに目標を立てていたんですけれども、なかなか思うように進むことができませんでした。役割を十分に果たすことができなかったことをお詫びしますと同時に、皆様からサポートお気遣いいただいたことを感謝しております。
[小山氏は会員総会欠席のため発言なし]

小野（議長）
　ありがとうございました。
　ご提案は以上の方々ですが、改めてここで全国委員を引き受けたい、あるいは常任を引き受けたいという方がいらっしゃれば、立候補をお願いしたいと思います。いかがでしょうか?

中筋（北海道地域グループ）
　中筋です。先ほど早まって全国委員就任の挨拶をしてしまいましたが、まだ承認されていないので、先に広報委員の退任の挨拶をするべきでした。
　改めて、常任委員広報委員としまして、皆様方にお世話になったことをお礼申し上げます。自分としても、常任の広報委員として楽しくやらせていただきました。改めて皆様方、常任の皆様、会員の皆様方にお礼を申し上げます。

小野（議長）
　全国委員立候補はございませんでしたので、第5号議案についてご質問を受けしたいと思います。繰り返しになりますけれども、挙手またはチャットの書き込み、もしくはマイクオンとしてご発言いただければと思います。議長が指名しましたら、氏名とご所属、要点を簡潔にまとめてお願いをいたします。

徳田（兵庫地域グループ）
　兵庫地域グループの徳田でございます。議案の所属の修正をお願いしたいのですが、昨年から大図研の名簿上は私、近畿大学に所属を変えております。確認が遅れてしまいましたが、現在登録されている所属は近畿大学になっております。

上村（事務局長）
　誤記申し訳ございません。修正します。

小野（議長）
　第5号議案の承認を採決いたします。先ほどの通り、採決がZoomの投票機能を用いて行いますので、よろしくお願いします。画面に賛成反対保留が表示されますので、投票をお願いいたします。
　投票を締め切りました。賛成が40票、反対0票、保留0票ということで賛成多数、第5号議案はご承認いただきました。
　それではここで休憩を取らせていただきた

いと思います。ちょうど10時40分になろうとしているところなので10時55分から再開したいと思います。よろしくお願いします。

[15分休憩]

小野（議長）

総会を再開させていただきます。

休憩中に全国委員の皆様、常任委員の皆様で全国委員会を開催されていたということですので、ここで審議いだいたことをご報告いただきます。

呑海（会長）

呑海です。2024/2025年度第1回全国委員会では、主に2つのディスカッションをしました。1つ目は次期の三役、会長、副会長、事務局長について、2つ目はこの全国大会の来年度をどうするかということについてです。

まず1つ目の時期の三役については、会長は新たに楫幸子さんを選出しました。副会長については赤澤久弥さんが続投です。そして事務局長については、上村順一さん続投です。楫新会長、赤沢副会長、上村事務局長の体制で進めることとなりました。

この後、皆様にご挨拶いただきます。楫さんに新しく会長をお引き受けいただくことになりましたが、お人柄もご経験も申し分ないということで私自身、本当に安心して、会長の職を辞すことができます。

そして来年の全国大会ですが、こちらはできましたらオンサイトでと思っていますが、会場を引き受けるところがないとオンサイトというのは難しいので、全国委員会で引き続き来年度の全国大会についてオンサイトにするか、オンラインにするかも含めてご検討いただくことになりました。来年度どうなるかということは、後ほど全国委員会から報告があるかと思いますので、よろしくお願いいたします。

以上、第1回全国委員会の報告を終わります。

なお、会長を交代しますが、この会員総会については、今日までの体制で準備してきたので、この会員総会が終わるまでは旧体制で続けさせていただきたいと思います。

小野（議長）

ありがとうございました。

では今年度の役員の新しい役員の方からご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いします

楫（新会長）

次期大学図書館研究会の会長を務めさせていただくことになりました、広島地域グループの楫幸子です。私は現在、広島にある安田女子大学図書館にて、専門職員として働いていますが、非正規職員でいる期間が長かったために、この大図研の研究会や全国大会を大いに活用させていただいております。これが今回、呑海会長から推薦いただきましたが、その推薦された理由の一つではないかと思っています。

2012年より会長を務められてこられた呑海会長は、図書館情報学を研究されている大学教授であり、大学図書館についても深い見識をお持ちです。また、支部から地域グループへの移行や、大図研の出版物のデジタル化、会議や全国大会をオンライン開催されるなど、多くの改革を進めてこられました。私がそのような会長になるのはちょっと難しいかもしれません。ただ今回、呑海会長がよくおっしゃってくださったのは、大図研は「失敗ができる場」であるっていうことです。わたしも、大図研が誰もが失敗を恐れず、イベントを企画したり、役職を経験したり、全国大会を運営するなど、さまざまな挑戦ができる場でありたいと考えています。もちろん私一人

の力では実現できませんので、会員の皆様のご協力をいただきながら一緒に大図研を盛り立てていけたらと思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

赤澤（副会長）

今期、引き続いて副会長という立場を拝命しました、赤澤です。今、楫さんからご挨拶いただきましたが、呑海さんにはまずお疲れ様でした。この総会にご出席くださった皆様、私より上の世代もいらっしゃいますし、もっと若い方もいらっしゃいます。楫さんは、私より若い方ですが、楫さんのような若い世代に大図研のバトンを繋いでいるっていうのはとても素晴らしいことだと思っています。ここには、先輩方が変えたことを、引き継いでいく若い世代が受け取って努力していくってことが、楫さんを支えること、このあたりの役割だと思っていますので、ぜひ支えながら頑張っていきたいと思っています。楫さん、今まで全国委員で一緒に仕事していたんですけれども、信頼できる方です。それも含めて、私は支える立場だと思っています。

先ほど、全国大会のこともありましたが、そのような場はみんなで作っていかないとなくなってしまう場です。大図研は個人で集まっていて、各地域グループや研究グループがありますけれども、それがあったとしても大図研自体が続かなければ、グループ活動もなくなってしまう場だと思っていますので、このような場に、総会に出てきてくださっているみなさんにはありがたいと思いますし、それを常任とか全国委員で支えてやっていくという体制ですから、その辺も含めて、ぜひお力をいただきたいとこと私からも重ねてお願い申し上げます。

引き続き今期もお願いいたします。

上村（事務局長）

上村です。沖縄は、今日は大変いい天気で、もし台風が一日遅れてきたらどうしようかなと思っていたところでございました。

毎年毎年、私が事務局長でいいのかなと思いながら続けています。どれだけ皆さんに役立てられているからよくわかりませんし、常任の皆さんにも、なんか上村の思いつきで散々色々と仕事をさせられていて、多分、そのうち僕は殺されるのではないかっていう気がしないでもないんですが、それでも会員の皆さんの、会員の活動をどうやって気持ちよく進められるかということは、常に考えながら行動しているつもりでございます。思いついて、何かやる努力は一応怠ってないつもりなので、引き続きお願いしたいなというふうに思っております。

私は前職が神田神保町にあるところで、今は琉球大学というところにいるのですが、あまり同業他社の動向を気にしない人たちが多く、大図研のイベントは随分宣伝しているのですが、あまり響いてなくて、もしかしたらこれが現状、全国的にもこのような状況をあらわしているのかもしれないなと思っております。せっかく国公私の大学の図書館員が集まっているという団体ですので、同業他社の動向を知識として持っていないと、今後やっていけないのではないかなと思うところです。

なので、どうやって大図研の活動を普及させて、しかも会員になってもらうのかというところを頑張りたいなと思いつつ、もう何年目になるかわからない、多分十年ぐらい事務局長をやっているような気がしますが、引き続き頑張っていきたいと思いますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

金子（議長）

ありがとうございました。

それでは、議案の方に戻ります。

先ほど後回しにした第3号議案「第55期2024/2025年度活動計画案」を審議させてい

ただきます。質疑については、本審議最後にまとめて承ります。

会員総会資料27ページをお開きください。まず、常任委員会の今年度の計画について、呑海会長よりご説明をお願いいたします。

呑海（会長）

常任委員会につきましては、ここに掲載させていただいているように、引き続き運営方法を検討していきたいとしております。原則オンライン会議です。オンライン会議だからこそ、旧会長は千葉、副会長は京都、事務局長は沖縄という体制で運営できていますので、この体制を引き続き続けられればということで記載させていただいております。

また、会議自体の時間も短縮で進めております。さらに試験的に2カ月に一回という開催とすることで、委員の負担軽減を図り、あるいは特定常任委員や運営サポート会員のご協力も引き続きいただきまして、効率的かつ円滑な運営を心掛けたいと思っております。

金子（議長）

次に各委員長から、今年度の活動計画について補足説明がございましたら、挙手をお願いいたします。ご発言の前に委員会名をお願いいたします。

特にはございませんでしょうか?

各委員長からの補足説明はありませんでしたので、最後に事務局からのご説明をお願いいたします。

上村（事務局長）

事務局長の上村です。会員総会資料には28ページです。今年の事務局も、事務局本体と事務局に内包する形で出版、会費徴収、会計、組織、メーリングリストの担当に分けて事務処理を行いたいと考えています。

大学図書館研究会のウェブページですが、会員がわかりやすいよう、あるいは非会員の方が会員になりたくなる、という魅力的なウェブページにしたいと思っております。広報委員会とも協働しながらやっていきたいなということを考えております。

金子（議長）

ありがとうございました。

以上、第3号議案でした。では第3号議案についてご質問をお受けいたします。ご発言の際は挙手、もしくはチャットへの書き込みをお願いいたします。議長が指名しましたあと、氏名と差し支えなければご所属、要点を簡潔にまとめて発言をお願いいたします。

野村（東京地域グループ）

第3号議案で全国大会委員会に関わる、今後の全国大会の持ち方について、先ほど行われる前提で活動していくような話がありましたが、全国委員会、常任委員会の記録などを見ますと、1月までに実行委員長が決まらなければ、大会の開催が見送るみたいなことが書いてあります。大会がないと本当に皆さんが集まるのは会員総会だけになってしまうのかなと思うところですが、例えばどういった開催の形になっても、研究発表とシンポジウムだけをやるかというふうに形をつけ、大会を続けることを現時点で検討されているのかどうか、あるいはどこかの地域グループからこういう形でならやりますよとなった場合に、検討していただけるのかどうかっていうところが、まず少し考えたところです。

もうひとつ、あと予算との関係もあるところですが、今年度の予算案で予備費がわりとあるように思うんですね。やたらに手をつける性質のものではないと思いますが、例えば全国大会に開催する上で会場探しというのは大変になってくるところがあると思うんです。ですので、多少は高くても、上等な会場を取るためにより注意を払うとか、あるいは

その会場探しとか、会場設定をどこかの業者に依頼するいうところに予備費を使う想定があるのかどうか、この辺について現時点が何かお答えできることがあったら、ご回答お願いします。

呑海（会長）

ご質問ありがとうございます。

全国大会について、ということでご質問いただいたところですが、全国大会の、特にオンサイトで何が大変かというと、現地で担当される方の労力というのが一番大変です。今、野村さんからいただいたように、会場が大変重要なポイントで、会場探しがまず大変ということはもちろんですが、会場費が高くて難しいというよりは、会場を探して、そこの運営と交渉するというところが、実は一番大変だということになります。

ですので、お金があればオンサイトで実現できるかというと、そうではなく、スタッフがいれば（スタッフというのは大図研の会員で大会実行委員になる方という意味です）、容易にオンサイトでも実行することができると思います。で、ここで開催しないとしないこともある、というのをあえて記録に残したのは意味があります。先ほど楫さん、あるいは赤澤さんからお話がありましたが、この大図研は、それぞれの会員が作り上げていく会です。ですので、それぞれの会員の皆さんが当事者意識を持って全国大会の運営に携わっていただければ、何の問題もなく継続していくことができると考えております。ですので、例えば全国大会のごく一部を、研究発表だけやるとか、分科会の一部だけやるとかいうふうにしたとしても開催することに違いはないのですが、やはり人手は要ります。ですので、縮小形式にしてやるかどうか？というのが今後議論されることかと思いますが、まずは、個々の会員が主体的に関わっていただきたいなと思うところです。

また、主体的に関わっていただくと、それぞれのスキルアップあるいは経験にもつながっていくということになりますので、ぜひともお願いしたいと思います。

上村（事務局長）

予備費のご質問に対して回答申し上げます。

確かに予備費がいっぱいになっているというのは、会計上好ましくないのは確かなので、先ほど呑海会長がおっしゃいましたように、いいところでやると当然に経費がかかるのは当然ですので、そのあたりで多額の執行が必要だということであれば、所定の手続きを取って予備費を使うというのはありだろうな、と考えております。

野村（東京地域グループ）

予備費のことについてはいまの上村さんの説明でわかりました。

呑海さんがおっしゃっていた会場探しというところに関わってくるかと思うのですが、前に筑波で全国大会をやった時には、呑海さんにご紹介いただいた現地の企業に委託して、会場探しや交渉をした経緯があると思います。そのような方法で、地域グループの負担減につなげる方法もあるかと思うのですが、今後の方向性としては、そういったところも含めてなるべく会員に関わってもらった方が良いと考えておられるのかどうか（業者の関与はない方がいいのか）、お聞かせいただければと思います。

呑海（会長）

野村さんが今指摘したように、筑波で開催した時は、全国大会が開催できない危機にありました。当時はオンサイトが一般的で、オンラインで開催するという選択肢がほぼなかったため、どこで開催するかというので、まず会場を探したということがあります。当

時は支部制で、各都道府県に支部を置くということになっておりましたが、茨城県に支部がなかったにもかかわらず、やはり全国大会をスキップするわけにはいかないということで、筑波で開催したわけです。野村さんからおっしゃっていただいたように、業者を入れて会場探しをお願いしたんですけれども、実は全部丸ごと業者にお願いできたかというと、全然そんなことはありません。私は現地が筑波ですから、かなりリソース割いてます。ですので、業者に委託したとして、会員の手を全く離れるということはないと思っています。

一方で当時、筑波で開催した時は、全国大会の運営に関わったのは、業者も入れてますけれども、4人でした。筑波大会以来、全国大会の開催を運営委員会形式にしてから長らく経ちます。今回は20人以上運営委員がいるという、大変ありがたい状況ではありますが、私自身は最低の携行人数は、実行委員は4名程度というふうに考えています。2、3人、あるいは4、5人で、オンサイトで全国大会やりたい方がいらっしゃったら、手を挙げていただければいいなと思います。

野村（東京地域グループ）

私も筑波大会では実行委員長だったので、業者の折衝などがまた違った大変さがあったというのは覚えておりますが、よい形で業者のリソースも取り入れてやっていければいいのかなという気がします。

赤澤（副会長）

今年度の常任の中で、この各委員会を、誰が主担当で分担するか、これから常任委員会で決め、全国委員会にも確認することですが、昨年度まで継続的に私がこの全国大会委員会にて、常任側の全国大会委員会の委員長を務めており、この件に関わっていることもありますので、私からも今の野村さんのご発言いただいたことも含めて、二、三私見も含めてちょっと述べさせていただきます。

先ほど呑海さんが今回の全国大会実行委員会、加藤実行委員長ののもとに動いている我々、Zoomの背景がそのようになっているのがその人たちですが、今回はたくさんいます。これは今まで、先ほど呑海前会長からご指摘あったとおり、かつては全国大会を支部が取り回す形の流れをとっていました。それがなかなか立ち行かなくなったので、実行委員会形式、有志で回すようになってきたのは皆様ご承知のとおりです。その際、分科会に関しては、全国委員会の方プラス常任委員のみなさんに分科会の部分を担当してもらっていました。これまで、その人たちは実行委員には入ってなかったのですね。今回の全国大会に関しては、全国委員の皆さんも実行委員会に入っていただいてます。それによって、その分科会との情報整理もうまくいってますし、他のこともたくさんお力そえてくださっているので、今回も、午後から始まりますけれども、非常にうまく回っているというところですので、呑海さんからも「如何にみんなでやっていく体制をつくっていくかというところが大事」ということでありましたけれども、体制さえうまくできれば、まあ最低4人って話もありましたが、それでできるということあるかと思います。

でも、もちろん少ないより多いに越したことありませんし、個人で参加しても、先ほど楫会長や退任する全国委員の方からもありましたけれども、いろんな経験を積む機会になるというのもあります。毎回、全国大会実行委員会は公募をしてますよね。皆さん、dtkメールご覧になってると思いますけれども、そういうことで今回、野村さんも入ってくださってるっていうことで、先ほどの私からの挨拶に戻りますけれども、このような場に皆さんに加わっていただけるのはありがたいと思います。

で、それからもう一つ、業者に投げるというお話も確かあるんですけれども、前回大阪地域グループが大変力を添えてくださって大阪大会がいい形で実現できたんですけれども、そのグループ単位でやるっていうのも、かつての支部でやっていた、一つの形の継承でもあり、大いに意味があることだと思っていて、そのグループがアクティブになるっていうのは、私も以前、京都地域グループで最近の全国大会やったときのメンバーに入ってたんですけど、やっぱりあると思うんですよね。もちろん、そういう形でやると大変なんですけれども。もし、全国大会の運営を個人、有志主体でもいいんですが、グループ主体でやってみようってとこもあると、それは大図研の一つの特徴はグループ活動が核にあるってことですので、そういうことも含めて、ご検討いただければと思う次第です。

その辺りも含めて全国大会、野村さんがおっしゃるように、我々の、当会にとって大事な一つの活動のコアになっているところですので、いい形で続けていける、持続可能な形で続けていける、その上で、みんながそのメリットを成就できる、というのが一番いいと思います。ぜひ引き続き会員各位には動いていただいたり、一緒にやろうぜっていうのにノッてきていただいたりすると嬉しいなと、今まで全国大会委員会に、常任で関わって見通して思う次第です。

金子（議長）

ありがとうございました。

第3号議案の承認の採決をいたします。採決はズームの投票機能を用います。画面に賛成、反対、保留が表示されますので、本議案への投票をお願いいたします。

では投票締め切ります。皆様の画面上に結果が表示されていますが、賛成40票、反対0票、保留0票、ということで、第3号議案は承認されました。

小野（議長）

最後に第4号議案に入ります。「第55期2024/2025年度予算案」ということになります。質疑については、本審議の最後にまとめて承ります。会員総会資料20ページをご確認ください。2024年度/2025年度の予算案について事務局長からご説明をお願いします。

上村（事務局長）

事務局長の上村でございます。1つ誤りがございますので、訂正させてください。一般財政予算案の合計の差し引き額のところが今90,000になってますけれども、明らかに間違っております。、正しくは5,889,334になります。今年度予算額から前年の予算額を引いた数になりまして。端数があるのに90,000ぴったりになるわけがないので、訂正をさせていただきます。こちらは大会の記録号で載せる議案の方では修正して載せさせていただきます。お詫びして訂正いたします。

その上で2024年/2025年度の予算についてご説明申し上げます。今回、ご覧いただくとお分かりのとおり、かなり大きな変更をしております。

今回、大会基金と出版財政を一般財政に一本化いたしました。これを統合をいたしましたところが大きな変更点でございます。この変更により、一般財政と時限的な五十周年記念事業基金のみにしたいと考えております。

大会基金と出版財政を統合した目的についてご報告申し上げます。端的に申し上げますと、管理を簡便にすることです。この件は常任委員会の議論を経まして、2024年3月24日（日）に開催されました、2023/2024年度第3回全国委員会でご審議を願い、承認されております。当該の全国委員会では、全国委員より「出版財政を別に立てていたのは独立採算制だったため、一般財政に組み込むとき

には、会費徴収以外の出版収入が分かるようにしておく必要がある」というご指摘をいただいた上でご承認を頂戴しました。ですので、今ご覧いただいている一般財政の収入、今ご覧頂いている収入の項番6のところに「刊行物収入」という項目を加えております。なお予算設計の考え方としては、一般財政も五十周年記念事業基金とも前年度実績を考慮して一般財政を組んでいるところです。

一般財政の変更点について、改めて昨年度と比較した差異を申し上げます。収入の部では刊行物収入と出版財政より「繰越」「繰入」という項目が増えております。なお、この増やした「出版財政繰入」と、従前よりありました費目の「大会運営基金繰入」というところは、今回の統合の結果、繰り入れの元がなくなりますので、今年度限りになります。

続けて収入の部に参ります。収入の部については、「会報発送委託費」と「全国大会運営費」の費目がそれぞれ増えております。会報発送委託費については出版財政から、後者は大会運営基金からそれぞれ移行したものでございます。いずれも実績に基づいてして予算立てをしております。出版財政の方も、後で掲載内容をご覧くださるとよくわかるとおりに重複した費目がございますので、それは一般財政の方の同じ費目に繰り入れ、その上で執行実績等を勘案して、こちらも予算立てをしております。

最後の五十周年記念事業ですが、先ほど第3号議案でご審議願ったところですが、今年度で全額執行を予定しています。

小野（議長）

ありがとうございました。

第4号議案につきまして、ご質問をお受けしたいと思います。ご発言の際は挙手もしくはチャットへの書き込みをお願いいたします。お願いします。

小村（大阪地域グループ）

大阪地域グループの小村です。資料の30ページ、収入の部の財政予算案のところで、上村さんから最初に合計金額の差引き額の欄の間違いをご訂正いただいたのはそのとおりだと思うんですけど、その上の方ですね。全国大会収入の行からこれ一行ずれてます。87万の行が重複してしまって一行分ずれたんじゃないですかね。

上村（事務局長）

そのとおりです。1行ずつ増えて、合計も書いてない状況になりますね。お詫びして訂正いたします。

野村（東京地域グループ）

五十周年記念事業のところで、海外図書館の研修旅行という項目が見えないんですが、これはこれ自体の開催を見送るという意味ですか？　それとも開催する時には項目を立てるということでしょうか？

上村（事務局長）

海外ツアーは昨年度の全国会員総会で多分開催しないということで抹消しました。今年度はありません。

呑海（会長）

呑海からも回答させていただきます。新型コロナ禍で開催できなかったので、一旦閉じますということで取りやめています。ですので、野村さんご指摘のように、もし、今後することがあれば新たに予算を立てるということでありますけれども、五十周年記念事業としては開催しないということがこの全国大会の会員総会で承認されています。

野村（東京地域グループ）

ありがとうございます。失念しておりました。。

加藤（千葉地域グループ）

予算案の支出の方で、前年度も会議、交通費及び会議費っていうことで、全国全国委員会の対面型を想定して組まれているかと思いますが、先ほど休憩時間内の全国委員会でも話題にはなったところですが、その開催見込みっていうものについて、常任の方で案がもしあるんなら聞かせて頂ければお願いします。

上村（事務局長）

毎年やるやる詐欺状態になってますが、そろそろ全国委員会は1回対面でやりたいなとは思っております。その程度のプランしか実はありません。

加藤（千葉地域グループ）

先ほど予備費の話もあったので。楫さん就任記念で、広島で全国委員会も悪くないかなと考えました。もちろん、支出がすごい伴うから冗談なんですけれども、そろそろみんな集まって、希望を言うなら、全国大会もオンサイトであったらいいなと思うし。オンラインだから、普段なかなか参加できない人も参加できるっていうメリットはあるけど、やっぱりリアルに会って、雑談から何かしら面白い話が聞けるっていうのもあるので、みんなと会いたいなというところの希望もある、ということで、一つご検討いただければと思います。

呑海（会長）

昨年度に関しては、常任の間だけでも日程調整ができなかったという状況もありました。とはいえ、今おっしゃったように対面の良さがありますので、ぜひ楫会長をはじめ、常任委員会等々で検討していただければなと思います。

長坂（京都地域グループ）

大会基金の廃止に伴い、今まで大会基金がやっていたような、大会会計に事前にお金を渡して、最後にそっちを清算した時に戻ってくるっていうのは、支出側としても収入側としても一般財政として行うように変わる、ということでよろしいでしょうか、というのが1点。

もう一点が大会予算自体は、どこで予算が立てられて、どこで決算報告がされて、全国委員会でされているという確認が2点。

この2点、ご教示ください。

上村（事務局長）

1点目は、この一般財政の中から出して返ってくるという格好になります。出すところが支出の部の、全国大会会費というところに該当します。で、今までは、大会運営基金は100万円を超えた部分は一般財政に云々という、操作感がありましたが、今度からはそれも含めて収入があった場合は、収入の後の全国大会のところにすべて入るようになります。

2点目は、全国大会については全国委員会で審議されて承認されます。会計監査も全国大会会計は受けております。

呑海（会長）

少しだけ補足させていただきますと、予算案自体は大会実行委員で検討して、大会実行委員は常任委員会の下にある位置づけになっているので、それを常任委員会に上げて、常任委員会で決めた後、常任委員会の全国大会委員から全国委員会にあげるという、そのような順序になっています。

長坂（京都地域グループ）

ありがとうございました。

加藤（千葉地域グループ）
　全国大会基金とのやり取りを一般財政でやるっていうのは、それはいいのですが、オンサイトで主に地域グループが中心になって運営をやっていた時に、黒字が出たらば、それなりのものを地域グループに還元する。赤字が出たら、それは負担しなくていいっていう不文律、明文化されていないものですが、そのようなルールがあったので、それが継続されるということだけは、ここで確認しておきたいなと思います。

上村（事務局長）
　その制度はそのまま続けていきたいなと、わたくし個人は思っております。

赤澤（副会長）
　そのルールを持たないと、継続性ということもありますし、なかなか地域グループ主体で動いてもらう場合に動きにくいってこともあろうかと思いますので、そこは生かす形で、予算立て上の位置づけが変わったとしても、その形で進めるのが妥当だと私も考えますので、その辺りは常任委員会で立案して全国委員会にご報告して、という従来の形を取ることになりますけれども、そこで提案するのが妥当なのではないかと思われます。
　ちなみに今回、50万円って今回の予算で積んでありますのは、近年のオンサイト大会を前提とした額に含まれていることを、事務局長の説明に補足しますので、そのような予算案になっているということも、ご承知おきください。

加藤（千葉地域グループ）
　よろしくお願いします。

小野（議長）
　ありがとうございました。
　第4号議案の採決を行いたいと思います。Zoomの投票機能を用いて行いますので、画面に賛成、反対、保留が表示されます。投票をお願いいたします。

　結果をご報告いたします。賛成が39票、反対0票、保留1票、ということで、採決としては賛成多数で、ご承認いただきました。

　こちらで用意しました議題は終わりました。他にご審議いただきたいことがございましたらお願いいたします。もし何かご発言ございましたら、同じように挙手またはチャットでお願いをいたします。

　特にご発言ないようですので。これで会員総会を終了とさせていただきます。長時間にわたるご審議ありがとうございました。
　進行を事務局にお返しいたします。。

上村（事務局長）
　ありがとうございました。改めまして議長をお務めいただいた小野さん、金子さん、ありがとうございました。

　今回会長が代わりましたので、前会長の呑海さんから一言頂戴したいと思います。

呑海（前会長）
　皆様、改めまして。この度、会長を退任することになりました呑海です。少しお時間をいただければと思います。
　思い返せば、大図研の委員長、現在の会長に着任させていただきましたのは第42回、2011年の東京大会でした。委員長および会長としては13年間が経ったということになります。委員長をお引き受けした時ですが、私は京都大学の図書館職員から筑波大学の教員へ転身したばかりでした。しかもテニュアトラックかつ大変年の入った助教という立場で、この転身自体を喜んでくださった方はほ

とんどいなかったという状態です。慣れない土地で、しかも不安定な身分で大図研の委員長をお引き受けするというのは、私にとってとてもリスキーなことでした。相談した職場の先輩には軒並み反対されている状態で、そんなことしてる場合じゃないって、1本でも多くの論文を書いた方が良いよ、というアドバイスを大抵のところでいただきました。また私は常任委員を経験したこともなかった上に、大図研の会員としてもアクティブに活動していたわけではなかったということもあり、私自身、大図研の委員長が務まるのか、とっても不安でした。迷った末、これは考えても答えは出ないし、そしてお声をかけてくださった前委員長の亀田さんのご判断を信じようということで、お引き受けすることにしました。

委員長になってから、正直言って初めはイバラの道でした。常任委員を経験したことがなかったということもあり、大図研の運営について知識も経験もなかったし、私が委員長になったことについて疑問や批判もたくさんいただきました。そもそもこの人誰?、っていうところから始まって、もっとふさわしい人がいるんじゃない?、っていうことも直接言われたこともありますし、大図研の代表はそもそも現場の図書館員である必要があるんじゃないですか、という批判もいただきました。直接的間接的に折りに折られて、私はもう大変傷つきました。

とはいえ、気を取り直して、まずは課題の洗い出しから始めて、先ほど楫新会長からお話してくださったように、さまざまな改革改善に着手し、そして実現することができました。特に大図研の名称変更というのは、私にとっても大変大きな経験でした。いずれもチャレンジングでしたけれども、チームでディスカッションを重ねて一つずつクリアしていくことができました。私がこの大図研の運営に関わって得たものは、チームで課題を抽出して解決していくことの経験と、そして楽しさです。

私は今、筑波大学の副学長として、知識も経験も年齢も、もうはるか上の皆さんとディスカッションしながら大学運営に関わっています。で、そしてそのノウハウの多くはこの大図研から得たと思っています。チームで課題解決をしていくことの楽しさが得られたのはチームに恵まれていたということもあります。特に就任当初は今回、全国大会実行委員長を務められている加藤晃一さん、また長らく編集委員長を務めておられた鈴木正紀さん、そして今は主に常任の皆さん、特に副会長の赤澤久弥さん、また事務局長の上村順一さんの存在なくしては、今日こうして無事に楫さんにバトンを渡すことはできなかったと思っています。

今回この場を通じて私が申し上げたかったのは、2つあります。1つは、オファーを受けた時がタイミングであるということです。何かのポストとか役割とかのオファーを皆さん受けることがあると思うんですけれども、その時に、自分はできるんだろうかって迷われることもあるかもしれません。そしてまだ自分はそのタイミングではないと判断されるかもしれません。でもオファーされた時がまさにそのタイミングだと私は思います。言い換えれば飛躍のチャンスだと思います。

もう1つは、先ほど楫会長からのご挨拶にもありましたが、大図研をぜひエクスペリメンタル・実験的な場として捉えていただきたいということです。経験や実績を積む場として、例えば文章を書いたり発表したり企画したり運営したりということを、実験的に失敗してもいいという状況で取り組むというのは、実務にもダイレクトにつながると私自身思っています。

最後に、会長という大役を引き受けてくださった楫幸子さんに感謝するとともに、敬意を示したいと思います。楫さん、本当にあり

がとうございます。安心して退任できることを、嬉しく思います。では、これで退任の挨拶とさせていただきます。皆様、大変お世話になりました。

上村（事務局長）
　ありがとうございました。
　それでは会員総会を終了いたします。

以上

研究発表・事例報告

2024年9月21日（土）　13:30-14:00

図書館の実空間とデジタル資源の接点をデザインする

間嶋　沙知・岡本　　真

本発表では、図書館が提供する情報としてデジタル資源を積極的に扱い、実空間のなかで活用を促す仕組みについて、泉大津市立図書館（大阪）で実施している実証実験の様子を交えて提案しました。

これまでの課題

デジタル資源は情報の物理的な制約を取り除き、利用者の選択肢を広げ、情報活用の効率を高めるものです。しかし図書館という実空間を訪れたとき、利用者の関心はそこに並んでいる紙の資料に偏りがちです。多くの図書館でWi-Fi環境やデジタルアーカイブ、電子書籍サービスが提供されるようになったにも関わらず、実空間で触れる情報は依然としてアナログ中心である場合が多いのが現状です。

デジタル資源はアクセスされて初めてその存在が認識されます。図書館の実空間で利用者がデジタル資源からスムーズに情報を得るためには、利用者が情報を探す行動・コンテキストのなかに適切なかたちで配置する情報デザインの観点が求められます。

本取り組みでは、図書館でのデジタル資源の提示方法を再考し、どのようなデジタル資源をどのように提示するかという、コンテンツとインターフェイスの課題を解決する仕組みを提案します。

連携協定による実証実験

2024年2月、泉大津市立図書館とアカデミック・リソース・ガイド（arg）は「図書館における紙媒体資料とデジタル資料を融合した情報提供のしくみ」を実現するための連携協定を結び、実証実験を開始しました。

argはコンテンツとしてのデジタル資源の情報提供、およびインターフェイスとしての「デジタル資源カード」のフォーマット開発（デザイン担当：majima DESIGN）を行いました。デジタル資源カードは、デジタル資源の①タイトル、②発信者、③NDC区分、④画面キャプチャ、⑤QRコード、⑥簡潔な説明文、⑦URLで構成します（図1）。利用者はQRコードをスマートフォンで読み取ることで、目的のリンク先へその場でアクセスできます。デジタル資源カードは関連する本棚に配置し、利用者が情報を探す自然な行動のなかで、紙の資料と並列にデジタル資源を発見できるようにします。

図1　デジタル資源カード

実証実験の第1期は2024年5月から開始しました。泉大津市立図書館は運営方針等に照らしてデジタル資源の取捨選択を行い、41種のデジタル資源カードを作成して館内に設置しました。館内ではアンケートを実施して、利用者からフィードバックを集めました。

得られたフィードバックをもとにカードのプレゼンスを改良し、2024年8月からは実証実験の第2期を開始しました。第2期ではアクセス解析機能のついたQRコードを実験的に導入し、読み取り回数を計測しています。

今後の展望

泉大津市では現在、デジタル資源のトップページを案内するA6サイズ（ハガキ大）のカードを棚分類に合わせて配置しています。デジタル資源カードの形状や案内先、配置方法は、今後さらに検討と実践を重ねる余地があると考えています。例えば、パソコンやタブレット用の詳しい説明文を載せたカードや、利用者に手渡すためのしおりや名刺サイズのカードへの展開が考えられます。書籍やテーマ展示とデジタル資源カードを組み合わせることで、紙媒体資料とデジタル資料を融合した情報提供をさらに進めることも期待できます。QRコードの読み取り状況から、利用者のニーズに合わせたデジタル資源の選定、配置位置の改善も検討できるでしょう。

2024年12月に開館する佐川町立図書館（高知）でも、デジタル資源カードを配架計画に取り入れた情報環境の構築を計画しています。

デジタル資源カードのフォーマットは、パブリック・ドメインとして公開しています。ぜひみなさんの図書館でも実践して、フィードバックをいただければ幸いです。

資料

・今回の発表資料は次のURLで公開しています
https://note.com/mjmjsachi/n/n3485695873df
・『ライブラリー・リソース・ガイド』（LRG）第49号では、本取り組みの詳細を「デジタル資源による図書館DX」として特集しています
・デジタル資源カードの関連情報を次のURLで随時発信しています
https://note.com/arg/m/m88ffc41b366a

（まじま・さち／ majima DESIGN）
（おかもと・まこと／
アカデミック・リソース・ガイド株式会社）

『Book: The Gathering』：知の劇場で謎を解く、近畿大学ビブリオシアター発のプロジェクト

徳田　恵里・篠原　圭介

1. はじめに

近畿大学アカデミックシアターの中心に位置するライブラリースペース「ビブリオシアター」[1] は、文理融合・領域横断的なリベラルアーツ教育を推進するための独自の図書分類「近大INDEX」[2] によってタイトリング・選書されている施設である。今回はビブリオシアターで実施されているプロジェクト、『Book:The Gathering』[3] について報告する。

2. 『Book:The Gathering』とは？

『Book:The Gathering（ブック・ザ・ギャザリング、以下BTG)』はビブリオシアターにて2023年6月22日より開始された新プロジェクト。その流れは以下のとおりである。

●掲示された手配書に付与された二次元バーコードをスキャンし、「クエスト」を表示
●指定された図書をビブリオシアター内で探し、手に取る
●図書の内容を元に「クエスト」を解き、本のトレーディングカード（以下、トレカ）を入手する。

ゲーム感覚でクエストを進めるうちに、新しい興味分野との出会い、読書技法の習得、そして読書の楽しさと知的興奮を味わうことができるようデザインされている。またプレイヤーには達成したクエストの件数とランクに応じてポイントが付与され、定期的にランキングが発表されている。教職員や卒業生にもランクインする者があり、BTGが幅広い利用者層にプレイされていることが分かる。

2.1. BTGクエストの種類

BTGには様々なクエストが用意されているが、概ね以下の4種類に分類できる。

●捜読系クエスト
資料の中に記載されている事項を調査する。資料の目次や索引を駆使して、効率的に目的の情報を見つけ出す。
●読書系クエスト
作品を純粋に楽しむことを目的とする。小説やエッセイ、コミックを対象にするクエストが多い。作品を通読し、その後作中のエピソードや固有名詞に関連するクエストを解く。
●謎解き系クエスト
本にちなんだ謎（クイズ）が出題される。推理力やひらめきが試される問題である。
●調査系クエスト
本に関連する情報を、ウェブや各種情報資源から調査し発見する。中には特定の新聞記事など、図書館が契約するデータベースを用いる必要があるクエストも存在する。調査や情報検索の力が試される。

そのほか長編コミックスを読破したものだけが解ける“マニア系クエスト”と言われる問題も、少数ではあるが作成されている。

2.2. 『目録カード』

BTGにはクエストをクリアするごとに様々な報酬が用意されている。なかでも特筆すべきは『目録カード』と呼ばれる“本のトレカ（＝トレーディングカード)”である。[4] これはクエストの対象になった資料ごとに作成されており、解答の報酬として参加者に配布される。『目録カード』はトレーディングカードゲームのカードのようにデザインされているが、記載されている事項は書誌情報・所在情報・キーワード（件名）など、伝統的な図書館の「カード目録」に準じており、所有者に当該資料の情報を伝える役目を果たしている。

この目録カードはBTGを通じた読書記録

をプレイヤーの手元に残すという目的があるが、もう一つ、「Book: The Gathering ARENA」[5] という対戦型カードゲームでも使用することができる。当然の事であるが、クエストの難易度が高いカードほど、強い手札となる。「ARENA」はルールが複雑なため、本稿での説明は割愛するが、ご関心のある方は、ぜひ参照元のウェブサイトをご覧いただきたい。

3. 学生との協働

『Book:The Gathering』はビブリオシアターのスタッフが一方通行で問題を提示するだけではない。このプロジェクトに関心を持った学生を「巻き込む」工夫が随所で行われている。

近畿大学には図書館サポーター Apricot Concierge という学生ボランティア団体があり、様々な展示やイベントを考案している。しかしBTGのイベントに関わっている学生たちは、必ずしも Apricot Concierge のメンバーという訳ではない。従来図書館活動に関心を寄せてきた学生とはまた異なる層も、このプロジェクトに参画していると言える。

3.1. クエスト作成ワークショップ

リリース1週間後の2023年6月29日には、第1回・第2回のクエスト作成ワークショップが開催された。単にゲームを楽しむだけではなく、クエストを作成する側に回って、より深くBTGを体験してもらうという試みである。

また、クエストを作る側は、当然ながら選書や資料の読み込みといった行動が必要になる。多くの問題を作れば作るほど、結果的に様々な本を読み込む機会が創出される。

3.2. BTGビギナーズツアー

2024年4月25日には、BTG経験者の学生がトレーナーとなり、未経験者とともにゲームをプレイするイベントが開催された。この際トレーナー役の学生たちは、企画段階から加わり、イベントの内容を検討した。

4. BTGの教育的効果

4.1. 専攻以外の分野の資料との出会い

2024年9月時点のBTGクエスト260問をNDC分類（7類はコミック以外とコミック）に分けて分類してみた。クエストの作問しやすさにより、割合にばらつきはあるが、すべての分類において問題が作成されている。ビブリオシアター自体、偶発的な本との出会いをコンセプトにしているが、BTGはそのコンセプトを強化しているという事もできる。

NDC	タイトル数	割合
0類	10	3.80%
1類	19	7.30%
2類	26	10.00%
3類	32	12.30%
4類	39	15.00%
5類	19	7.30%
6類	11	4.20%
7類（コミック以外）	39	15.00%
7類（コミック）	24	9.20%
8類	4	1.50%
9類	37	14.20%
計	260	

図1. クエストの分類別数・割合

4.2. 捜読系クエストの効果

目次や索引を手掛かりに、資料の中に書かれた一節を探す捜読系クエストは、解答方法が辞書・事典を引く感覚に極めて近い。辞書類が『ジャパンナレッジ』や『コトバンク』などのデータベースに置き換わっている今だからこそ、冊子体資料を「引く」感覚を得られるのは、貴重な経験である。

4.3. 調査系クエストの効果

調査系クエストでは、資料に関連した新聞記事や統計など、様々な情報を探すことになる。以下に1問公開されているクエストを例

示する。

No. 096　NOAH11『世界基準サッカーの戦術と技術』[6)]

「2010年ワールドカップ南アフリカ大会の日本代表選手のうち、対オランダ戦におけるパス受け回数合計が13回だった選手がいる。2022年カタール大会の対コスタリカ戦における同選手のパス受け回数合計は何回か?

なお、調査にあたってはFIFA公式Webサイト（FIFA Training Centre）の公表情報を参照のこと。」

このように、資料に関連する、しかしテキストとしては掲載されていない情報を、試行錯誤して探すという体験が持てる。資料の参考文献を見たり、関連分野のデータベース検索やウェブサイトを参照したりするなど、クエストにより、調査対象はさまざまである。

ただしBTGはあくまでゲームであるため、解き方は自由。上の問題も必ずしも一次情報であるFIFA公式Webサイトに当たる必要はない。たとえ孫引きでも、正解の数字を見つけてくれれば、問題はクリアとなる。プロセス・情報源を問わないというところが、”レファレンスの情報検索・調査”とは大きく異なっている。故にクエストをそのまま『情報サービス演習』等の課題に転用することはできないという点は、教員として留意しておきたい。

5. 最後に

BTGのクエストは、特別なものを除き公式サイトから全て公開されている。そのため、勤務先図書館や私物の本を使って挑戦することも可能である。本プロジェクトについて、一人でも多くの方に、実際に「クエスト」を体験していただきたい。

参考資料

1）“BIBLIOTHEATER”. 近畿大学アカデミックシアター . https://act.kindai.ac.jp/biblio-theater.html,（参照 2024-11-05）.

2）“近大INDEX: 実学に向かう知の分類”. 近畿大学アカデミックシアター . https://act.kindai.ac.jp/kindai_index/index.html,（参照 2024-11-05）.

3）Book: The Gathering. https://sites.google.com/itp.kindai.ac.jp/book-the-gathering/home,（参照 2024-11-05）.

4）“REWARDS”. Book: The Gathering. https://sites.google.com/itp.kindai.ac.jp/book-the-gathering/rewards,（参照 2024-11-05）.

5）“BATTLE”. Book: The Gathering. https://sites.google.com/itp.kindai.ac.jp/book-the-gathering/battle,（参照 2024-11-05）.

6）“096:『世界基準サッカーの戦術と技術』”. Book: The Gathering. https://sites.google.com/itp.kindai.ac.jp/book-the-gathering/Q/096,（参照 2024-11-05）.

（とくだ・えり／近畿大学短期大学部商経科司書課程非常勤講師）

（しのはら・けいすけ／丸善雄松堂株式会社（近畿大学ビブリオシアター勤務））

課題別分科会

第1-3分科会 2024年9月21日（土）　14:15-16:15
第4-6分科会 2024年9月22日（日）　10:00-12:00

第1分科会　資料保存

テーマ：資料保存における地震対策について
担当者：山上朋宏、北川正路
参加人数：16
司会：山上朋宏、北川正路
報告者：
　山上朋宏（奈良女子大学学術情報センター）
　北川正路（東京慈恵会医科大学 国際交流センター）
配布資料：
　事前アンケート集計結果（山上朋宏）
　資料保存における地震対策の経験の共有と継承（北川正路）

1. はじめに

第1分科会「資料保存」のテーマは、「資料保存における地震対策について」でした。分科会案内には「地震による資料の破損、紛失などへの被害の内容と被害への対応の具体例、地震による資料保存への被害の防止方法の例（設備、保管方法）、各図書館での資料保存の地震対応の内容と問題点」について、ディスカッションを通して考えていくと記載されていました。私は、約8年前に平成28年熊本地震を経験したので、その際に資料にどのような影響があったのかについて一例を伝えることができるのではないか、また、自分の記憶が曖昧になってきていることを自覚しており、当時を振り返ることも必要だと思って、この分科会に参加しました。

分科会参加者は、事前に被災経験の有無、館内の設備、防災計画等の事前アンケートに回答しました。事前アンケートに回答するにあたって、当時職場で作成した震災記録[1]や、個人的に保存していた紙の資料が役に立ちました。分科会では、「ひと」を守る・「建物」を守る・「資料」を守る・震災直後の対応・震災後の対応・災害を忘れないために、という各テーマに沿って、アンケート集計結果の説明と、参加者からのコメントが寄せられました。以下、分科会中で話題になったことを抜粋して記録したいと思います。

2.「ひと」を守る

私から、平成28年熊本地震の前震が発生した時（2016年4月14日午後9時26分（熊本市中央区:震度5強））の熊本大学附属図書館中央館（以下、「熊大図書館」という。）での状況（開館中）について、前述の震災記録の記述を元にしながら説明をしました。

地震発生時には閲覧担当スタッフは2名、利用者は100人以上が滞在していました。中央館では「危機管理マニュアル」を作成していましたが、マニュアルに従ってまず安全確保を行い、館内を確認した上で利用者を避難誘導することができていました。利用者の中には、そのまま学習を続けようとする方もいたとのことです。資料の落下は見受けられましたが、翌日の作業で復旧が完了する程度でした。

その後、2016年4月16日午前1時25分に本震が発生しました（熊本市中央区:震度6強）。書架の仕様書の想定を大幅に超える震度だったためか、落下防止バーが付いた棚板が資料ごと吹き飛ばされている箇所が複数見受けられました。開館時間中ではなかったので、人への被害はありませんでしたが、開館中であったなら、「ひと」を守ることはできなかったのではないかと今でも思っていま

す。

開館を再開した後、余震がいつ終わるのか、次に強い揺れが来るかどうか分からない中での開館・閉館の判断はどのようにしていたのかと参加者から質問がありました。当時は、授業中に比較的強い揺れが発生しても、短時間で揺れが収まれば授業を中断することはなかったため、図書館でも、揺れる度に臨時閉館を検討することはありませんでした。

3.「資料」を守る

資料の落下を防止するための対策について意見交換をしました。揺れを感知して落下防止バーが作動する棚板や、自動的に傾斜する棚板、棚板に貼り付ける落下防止テープ・シートが紹介されました。テープ・シート類は、経年劣化すると効果が落ちるため、状態を定期的に見ておく必要があることが指摘されました。また、費用の面から、特殊な棚板やテープ・シート類を全ての書架に設置することは難しいため、目的にあわせて設置箇所を決めていることが報告されました。

熊大図書館では、避難経路として確実に確保しなければならない場所の近くにある書架に落下防止テープ・シートを重点的に設置しています。本が落下してしまうと、書架と書架の間の通路は30cm以上本が積み重なってしまい、その上を歩いて避難できる状況ではなくなります。資料を守ることに加えて、避難経路を確保し、「ひと」を守ることも目的の一つとなっています。

4.「建物」を守る

資料の落下や書架の転倒以外に起こりうる被害についての情報共有がありました。地震の揺れによるスプリンクラーの誤作動や配管からの漏水により床に水が溜まり、落下した資料が水濡れしてカビが生えてしまったケースが紹介されました。

この他、普段はあまり意識していませんが、天井に防炎パネルが設置されている場合には、地震の際にパネルが損傷します。ガラス製のパネルの破片が散乱したり、大きめの破片が書架に突き刺さったりします。熊大図書館では、防炎パネルの真下に職員が常駐する机を設置していたので、地震後に別の場所に移動させました。

他には、液状化現象によって敷地や道路が隆起し、職員が出勤する際に支障が生じたことなどが報告されました。

5. 貴重資料・文化財について

アンケートの設問で「資料（特に貴重資料）の避難場所は用意されていますか」というものがありました。参加者全員が「用意されていない」という回答でした。熊大図書館でも、特に避難場所の確保や災害発生時に持ち出す優先順位などを定めてはいません。平成28年熊本地震の際には、災害発生後に文化庁や自治体の文化財所轄部署から被害状況について確認がありましたが、特に被害はありませんでした。

参加者からは、国宝級の資料を所蔵していれば、救出の優先度を上げるより、防火金庫にて保存するなどの対応が必要ではないかという意見が出されました

6. 災害を忘れないために

参加者から、東北大学附属図書館が作成した対応記録[2)]が紹介されました。この記録中の「3.これまでの書籍落下防止対策と今回の状況」では、分科会で紹介された様々な落下防止対策の事例が端的に見やすくまとめられており、すぐに実務に役立てることができそうだと思いました。熊大図書館でも前述の震災記録を作成しましたが、被災直後からの日誌のような形式で記述しているため、読むのに時間がかかることが難点だと思いました。記録を残す時には、その記録がどのような使われ方をするのかを想定して構成する必要が

あると思いました。

7. さいごに

この分科会に参加した2日後に、熊本県阿蘇郡南阿蘇村にある「熊本地震震災ミュージアムKIOKU[3)]」を個人的に訪問しました。「KIOKU」は、熊本地震で被災した東海大学阿蘇キャンパス（農学部）の跡地に整備された平成28年熊本地震の記憶・経験・教訓を後世に伝えるための展示施設と震災遺構です。東海大学阿蘇キャンパスの校舎の真下に活断層があったため、同じ場所での復旧が叶わず、現在は部分的に校舎が保存・公開されています。「KIOKU」では、南阿蘇村の方々が語り部となって当時のことを伝える活動に取り組まれており、また、益城町図書館が収集した震災関連資料が展示されています。

第1分科会が開催された同じ月の9月5日に、被災した阿蘇キャンパスから20キロ程離れた場所に移転した東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパスの図書館を訪れる機会がありました。熊本地震の発生からキャンパスの移転が完了するまでの全てに関わられた先生からお話を伺いましたが、「ここまでに、8年かかりました。」という言葉が忘れられませんでした。

阿蘇くまもと臨空キャンパスを訪れたことと、第1分科会に参加したことが重なって、ずっと行こうと思っていたけれど、なかなか足を運べなかった「KIOKU」を訪れることができました。日々思っていることを行動に移すのは意外と難しいものですが、第一分科会がそのきっかけとなりました。参加できてよかったです。

注

1）澤田敬.「平成28年熊本地震」業務記録. 熊本大学附属図書館, 2017. http://hdl.handle.net/2298/36463 ,（参照　2024-11-18）.

2）東北大学附属図書館. 東北大学附属図書館における福島県沖地震（2022年）対応記録. 2022年3月25日掲載, 2023年3月27日更新. https://www.library.tohoku.ac.jp/news/2021/TUL_EQ20220316report1.html ,（参照 2024-11-18）.

3）熊本地震震災ミュージアムKIOKU https://kumamotojishin-museum.com/kioku/ ,（参照　2024-11-18）.

（廣田桂／ひろた・けい／
熊本大学附属図書館）

第2分科会　学術情報基盤

テーマ：機関リポジトリの表示設定とカスタマイズ
担当者：楫幸子、有馬良一
参加人数：26名
司会：楫幸子
配布資料：なし

第2分科会「学術情報基盤」では、喫緊の話題であるオープンサイエンスに関連のある機関リポジトリがテーマとして取り上げられ、事前に自他を問わず紹介したい機関リポジトリについて報告できるようスライドを準備することが呼びかけられた。当日は担当者から声のかかった5名が、パワーポイントや自機関の機関リポジトリを画面共有する等して紹介し、休憩を挟んだ後、改めて機関リポジトリに関する意見交換を行った。

今回はJAIRO Cloudを機関リポジトリとして利用している機関間での情報交換も目的とされているのか、参加者の多くがJAIRO Cloudを利用しているようだった。また、オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）の作業部会員等も参加していたため、本分科会のテーマから少し外れた新システムWEKO3そのものについても話題が提供された。

1. 機関リポジトリの紹介等

司会者から今回のテーマについて説明された後、5名の参加者から所属機関の機関リポジトリの紹介や現在抱えている課題等について事例報告された。

紹介された機関リポジトリは、JAIRO Cloudだけでなく、他システムのものもあった。

JAIRO Cloudを利用している機関からは、WEKO3移行後、レイアウトが思うように設定できなくなったという話や今後急増すると見越される学術雑誌掲載論文のインデックス・ツリーの表示方法についての提案等がされた。

他システムを利用している機関として本学の機関リポジトリも紹介した。本学では図書館システムに付随する機関リポジトリ機能を利用しているため、管理は図書館システム上で行っている。画面共有しながら実際にどのように表示されるか、どのような点に課題を感じているかを紹介したところ、参加者からは画面遷移が早くてよい、全体の構成が見やすいと好評であった。当方としては動作が特段早いと感じたことはなく、画面のつくりもシンプル過ぎると考えていたため、意外な反応だった。

さらに海外の操作性の高いデータリポジトリDryadについても、どのような点が優れていると感じているか、どのように構成されているか等が紹介された。

2. JAIRO CloudのシステムWEKO3について

参加者による機関リポジトリの紹介に入る前、司会者から機関リポジトリの使用感について簡単なアンケートが行われた。その結果、使いにくいと思う理由としての回答では、「表示に時間がかかる（60％）」がもっとも多く、「表示結果で何がどこに記載してあるのか分かりにくい(45％)」というものが次点だった。

2023年度からJAIRO CloudはWEKO3というシステムに切り替わった。本学は利用していないため関知していなかったが、アンケート結果からも分かるように、本分科会の参加者からは「動作が遅い」という声が目立った。具体的には、インデックス・ツリーを複雑にすると動きが鈍くなる等の推測がされていた。

他方、別の変化についての意見もあった。以前までは情報検索エンジンで検索すると、機関リポジトリ内の論文詳細画面がヒットしたが、WEKO3に移行してからは直接該当論文のPDFがヒットするようになったという。ただそうすると、機関リポジトリのレイアウトやインデックス・ツリーをいかにエンド・ユーザに使いやすい配置や構造にするかと苦慮すること自体に、意味が見出せなくなってくる。機関リポジトリを管理する側として、今後何を求められ、どのような知識や技術を身に着けるべきなのか。改めて考えさせられる発言だった。

3. 本来の機関リポジトリの役割とは

意見交換をする中で、参加者から印象的な発言があった。機関リポジトリとは「保管庫」の意味であり、そもそも、ただ保管できればよかったはずである。しかし、機関リポジトリの設置を推進する過程で、上層部へのアピール材料として付加した“機関の成果物を見せるためのショーケース”という側面が大きくなってしまったのではないか、と。

当日交わされた意見をまとめると、以下のようになる。JAIRO CloudはWEKO3に移行し、情報検索エンジンで直接論文のPDFがヒットするようになった。その一方で、WEKO3は機関リポジトリの画面上での操作性がよいシステムとは言い難く、所定のレイアウトや設定の範囲内では各機関が独自の個性を出すのは難しい。

これらの意見を改めてみると、本来の機関リポジトリの役割とは何か、多くの大学図書

館が機関リポジトリとして利用しているJAIRO Cloudやそのシステムである WEKO3にとっての得不得手は何か、大学図書館のステークホルダーが今後の機関リポジトリや図書館に求めていることは何か、改めて考えるときがきていると感じた。

4. おわりに

今回第2分科会に参加したのは、今年度中にJAIRO Cloudに移行予定である本学の業務に少しでも有益な情報が得られれば、という軽い気持ちからだった。参加前は、多くの機関が利用しているJAIRO Cloudに移行すれば本学も一安心と考えていたが、JAIRO Cloudにも様々な課題があることがわかった。また、参加者の様々な意見に触れ、その後も関連情報に触れる度に考えさせられ、大学図書館は大きなパラダイムシフトの時期を迎えていると考えるようになった。

分科会に参加したことで、新たな知識を得、新たな考え方ができるようになった。改めて今回のテーマを担当されたお二人に、また毎年学ぶ機会を設けてくれる大学図書館研究会に感謝の意を表したい。

（石立裕子／いしだて・ひろこ／
帝京平成大学中野キャンパス メディアライブラリーセンター）

第3分科会　キャリア形成

テーマ：資格・検定を中心とした自己研鑽について
担当：下山 朋幸、中川 恵理子
参加人数：22名
司会：下山 朋幸
報告者・報告タイトル：
岡田 智佳子氏（NPO法人大学図書館支援機構）「「IAAL大学図書館業務実務能力認定試験」とは－運営側の視点から－」
寺升 夕希氏（滋賀医科大学附属図書館）「日本医学図書館協会（JMLA）認定資格『ヘルスサイエンス情報専門員』」

はじめに

第3分科会・キャリア形成の今年のテーマは「資格・検定を中心とした自己研鑽について」であった。大学図書館業務に関する2つの資格や検定の概要・目的の紹介と、受験者側から意見・感想などを報告、次に資格・検定以外の自己研鑽の紹介および情報交換を行うことで、業務の質の向上へ繋げようという狙いであった。

事例報告

まず、NPO法人大学図書館支援機構（IAAL）理事長の岡田智佳子氏より「IAAL大学図書館実務能力認定試験」（以下、IAAL認定試験）の概要・目的等が述べられた。

IAAL認定試験の目的は「全国どこの大学図書館でも業務上通用する共通実務の面から、就労者が勤務する図書館や受託業者が変わった場合でも、各人の能力が証明されるシステムの構築を目指した。」[1] としている。この試験では、試験問題を毎回作問するため「合格者が少ない場合でも合格ラインを落とさない」方針を維持してきた。だが、NACSIS－CAT2020の運用開始に伴い、それまでのように正解が1つではなくなったことをはじめ、諸般の事情で終了となった。

参加者からは、自己アピールや昇給につながった、周囲の人に受験のきっかけを与えたと、いったメリットが挙げられた。また、非正規雇用者の受験が多い理由は、「生き残り」の意味合いからも頷けるといった声も寄せられた。

次に、滋賀医科大学付属図書館／特定非営利活動法人日本医学図書館協会（JMLA）認定資格委員会委員の寺升夕希氏より、認定資

格「「ヘルスサイエンス情報専門員」（以下、ヘルスサイエンス専門員）の概要が述べられた。

ヘルスサイエンス専門員は検定試験と異なり、「ヘルスサイエンス分野の図書館等の情報サービス機関での実務経験を持ち、保健・医療その他関連領域の情報の専門的知識及び技能と、関連する情報サービスの管理、調整能力を有している者を日本医学図書館協会がヘルスサイエンス専門員として認定する」[2)]としている。認定を受けるには、ヘルスサイエンス系図書館での勤務経験をはじめ、既に取得している資格や期間内に行った活動をポイント化して取得要件を満たす必要があるが、ヘルスサイエンス専門員「基礎」取得者の有効期限が永久であり、大学図書館以外でもヘルスサイエンス分野の業務で役立つことがメリットである。例えば看護学部や薬学部、リハビリテーション学部などヘルサイエンス分野の学部・学科を有する総合大学での勤務経験の場合、認定の対象になるかどうかは委員会での都度判断になる。

情報交換より（抜粋）

自己研鑽は「三日坊主」がつきまとう。その解決方法として、勉強グループを作る、受験することをカミングアウトして周囲から「受験者」として見られることによって自分にプレッシャーを与える、受験日を締切りに設定して勉強を進める等、納得できる意見が多く寄せられた。

その他、受験会場が無い県と、会場のある都市圏で地域格差が生じているため、コンピューターによるCBT方式の導入や受験会場を増やすなど、全国でもっと気軽に受験ができるようになればといった切実な希望も出た。

資格、検定試験、自己研鑽についての思い

検定試験は「IAAL認定試験を受験したことで、どの業務に向いているかが分かった」との参加者の声からも分かるように、客観的に自己を見る上でも役立つものである。その一方で、ライフステージの変化によって勉強する時間を作ることさえ難しくなる時期もあるだろうし、逆に新たな自己研鑽や資格が必要になる場合もあるだろう。あるいは、図書館から異動する場合もあるだろう。しかし、どのような場面に直面しても、これまで培ってきた資格・検定、自己研鑽は自己の土台となり、必ず役立つものである。

奇しくも、昨年12月から新たな業務を担当することになった。初めてのことも多く数か月間は戸惑う日々であったが、大学図書館研究会をはじめ、これまでの自己研鑽や資格が役立っている。

おわりに

参加者の合格体験や次の目標に向かう姿に触れ、継続中の学びに力を得たように感じた。貴重な機会を与えてくださった主催者並びに参加者に改めてお礼申し上げたい。

（森藤恵子／もりふじ・けいこ／
兵庫地域グループ）

第4分科会　大学図書館史

テーマ：大学図書館問題研究会の歴史を見る Part8
担当者：小山荘太郎、加藤晃一
参加人数：9名
司会：小山荘太郎
報告者・報告タイトル：
北川正路（東京慈恵会医科大学）・五十周年記念事業記念出版物の編集について
加藤晃一（千葉大学）・『虎に翼』に見る明律大学図書館シーン
配布資料：なし

今年の当分科会の趣旨は、大図研の50年に渡る活動を振り返り、大図研及び大学図書館における主要な歴史を共有することであった。大図研では現在、五十周年記念事業記念出版物の編集を進めている。この出版物では大図研50年の歴史をまとめる予定で大学図書館史分科会も資料提供等で協力している。記念出版物編集委員会担当の北川正路氏から記念出版物の企画内容を伺い、その歴史を掘り下げていくとともに大図研の歴史継承について意見交換することとなった。続けて加藤晃一氏から短めの発表もあった。以下、ご発表の内容をまとめ、最後に筆者の感想を書く。

1. 五十周年記念事業記念出版物の編集について（報告者：北川正路氏）

北川氏から記念出版物の編集作業の現状について報告があった。記念出版物の現時点での構成案は、巻頭言、略年表、組織の変遷・役員、顕著な動き、支部・地域グループ変遷・役員、支部・地域グループの振り返り、出版物目次一覧となっている。このうち「顕著な動き」が、大図研の歴史の概要を記述していくパートであるが、現時点では、歴代の委員長の時代に分け、主な出来事を記述していく構成となる予定である。

当分科会では、北川氏から、各委員長の時代における主な出来事を参加者に対し確認しつつ、何らかの補足は無いか、各委員長の時代について、どのように総括することができるかの確認もなされた。暫定的な結論としては、概ね以下の通りに総括できたのではないか。なお、このまとめは報告者や参加者の総意に基づくものではなく、あくまでも筆者の私感である。

初代：松田上雄委員長時代
（1970年～1979年）
大図研の基礎を作った時代

第2代：浅賀律夫委員長時代
（1979年～1981年）
学術情報システムに向き合った時代

第3代：酒井忠志委員長時代
（1981年～1990年）
現在の大図研の基本を作った時代

第4代：松井博委員長時代
（1990年～1999年）
電算化に関する議論や研究活動が進行した時代

第5代：亀田俊一委員長時代
（2000年～2011年）
会員数減少などの困難に直面した時代

第6代：呑海沙織委員長時代
（2011年～2020年）
研究グループ形成、オンライン化の時代

2.『虎に翼』に見る明律大学図書館シーン（報告者：加藤晃一氏）

加藤氏からは、2024年放送のドラマ『虎に翼』における大学図書館シーンについてコメントする発表があった。具体的には、ドラマ中のシーンを紹介しつつ、モデルとなった明治大学の図書館の歴史とのリンクを解明した。この発表の続きは、当研究大会二日目の自主企画「図書館こぼれ話。見てたドラマに図書館が出てきた！」においても発表された。

3. 感想

北川氏の発表に対し、参加者側から、委員長だけでなく事務局長の動きにも注目する必要性があるという指摘がなされるなど、同時代の大図研を知る参加者を中心に、興味深いやりとりがなされた。筆者も以前、図書館員の学術情報システム受容に関する論文を書いた経験もあり、また、これまで参加してきた当分科会の復習的な側面もあり、興味深い内容であった。

五十周年記念事業記念出版物の編集に関し一点だけ提言をさせていただくが、今回のご

発表で語られたような編集上の労苦とその克服について、どこかでまとめる形で記録に残された方が良いのではないだろうか。図書館の歴史の書き方については近年、奥泉氏が出版されたご著書が参考となるが、図書館関連団体の歴史の書き方に関する指南書の類については筆者は確認できていない。この歴史編纂の過程自体を何らかのまとまった記録として残すことや、マニュアル化することも、せっかくの重要な機会であるため大事ではないかと、作業の負担を増すような提案で恐縮ではあるものの感じた次第である。

注

1）今野創祐「京都における学術情報システムの受容」『図書館界』74（2），2022．7，p.95-100.

2）奥泉和久『図書館史の書き方・学び方：図書館の現在と明日を考えるために』日本図書館協会，2014，246p.

（今野創祐／いまの・そうすけ／
東京学芸大学）

第５分科会　出版・流通

テーマ：学術論文の即時オープンアクセスと図書館

担当者：柿原友紀、吉田弥生

参加人数：39名

司会：柿原友紀

報告者・報告タイトル：

柿原友紀氏（熊本大学附属図書館）「国内の状況」

吉田弥生氏（大阪大学附属図書館）「海外の状況」

配布資料：なし

第５分科会は「学術論文の即時オープンアクセスと図書館」というテーマで開催された。はじめに２名の報告者から国内、海外の状況について報告があり、その後、意見交換が行われた。

（1）現況の整理と共有

はじめに柿原友紀氏より「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」及び「「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」の実施にあたっての具体的方策」が策定されるまでの経緯とその内容について報告があった。次に吉田弥生氏より海外のオープンアクセス化の状況についてLiden Rankingを元に報告があった。イギリスでは機関リポジトリによるオープンアクセス化が主流であり、フランスでは国営のリポジトリがあり、ドイツでは国全体で転換契約がされるなど興味深い内容であった。

（2）自機関の論文投稿状況の確認や分析をどのように行っているか

柿原友紀氏より即時オープンアクセス義務化の対象となる論文の調査方法として、科研費データベースの検索や研究推進部門への採択件数の確認など、熊本大学の事例を交えながら紹介された。その後、意見交換がなされ、教員の業績システムやresearchmapとの連携が必要であることが共通の認識であった。

（3）即時オープンアクセス対応に向けての、研究者への周知や研究者の負担軽減について

研究者への周知方法について、意見交換が行われた。その中で、①オープンアクセスウィークに全学一斉メールを送付する。②「英語論文の書き方セミナー」などの実施に合わせて周知する。③リポジトリの登録説明会時に周知する。④部局別のオープンアクセス率を会議で報告する。⑤図書館内にデジタルデータを扱うブースを設置する。⑥研究支援部門と共同でアンケートを実施する。⑦個別にアプローチする。など多くの意見があった。

その一方で、学内研究者へアンケートを行った大学からは、研究データの保存・管理・成果の公開について、認識の低さや誤認識があるように見受けられたとの報告もあった。

研究者・機関リポジトリ担当者双方の負担軽減しつつ登録率の向上を目指す方法としては、researchmapのデータを業績システムに記載する際に、リポジトリに登録されていない論文の登録を促すメールが送付されるシステムが紹介された。また、ORCIDにはDOIが付与された時点でCrossRefやJalCの情報を元に業績を自動で登録する機能があり、さらにはORCIDに登録された業績の情報を自動的にresearchmapに取り込む機能があることから、こういったシステム間の自動連携機能を活用することにより、研究者の業績情報を正確かつ素早く、労力をかけずに捕捉することが可能となることも紹介された。また、JAIRO Cloudとresearchmapの連携が進められているとの情報共有があった。

(4) 即時オープンアクセスに対応するための、機関リポジトリ登録の体制整備について

今後、「機関リポジトリ登録数の増加」が想定されるものの、担当人数の増員は難しいため自動化が必要であるという意見があった。特に著作権ポリシーの確認に人手が必要となり、個人のスキルに頼る部分が多いため、Unpaywallなどのツールの活用や各大学の調査結果を共有できるとよいのではないかとの意見もあった。また、研究者に「著者最終稿」と「出版社版（Version of Record）」の違いを理解してもらうことの難しさが各大学に共通した課題であった。

人数が多い分科会だったため全員が発言することは難しかったが、音声だけでなくチャット上でも活発な情報共有が行われた。

（宮丸由美子／みやまる・ゆみこ／
九州産業大学図書館）

第6分科会　利用者支援

テーマ：レファレンスで困ったネタを語り合う会
担当者：徳田恵里、小林泰名、諏訪有香
参加人数：22名
司会・話題提供：徳田恵里
配布資料：なし

1. はじめに

今年の全国大会は、つまみ食いのように、都合のつく日程だけ参加させていただきました。この時間なら…とスポットだけでも参加できるのはオンライン開催のありがたい点で、実行委員の皆様には心より感謝申し上げます。

さて、私が参加した分科会の内の1つは、第6分科会「レファレンスで困ったネタを語り合う会」でした。私がこの分科会に参加したのは、まさに現在の担当がレファレンスサービス担当で、“所属が異なるメンバーと、レファレンスについての悩みや事例の共有をしたい。その図書館の特色や、自分になかった視点を知りたい”と思ったからです。

2. 分科会の進め方

第6分科会は、参加者が4つのグループに分かれてディスカッションを行った後、全体に戻り、グループ毎に話した内容の報告、最後にまとめといった流れで進められました。私のグループは4名で、それぞれの経験や現在所属している図書館がカバーしている分野も様々でした。少人数のため色々な話題を話すことができ、1時間のディスカッションの時間があっという間に感じました。全体の報告では、専門図書館ゆえの驚きの事例もありつつ、自分達のグループで出た話題と同じような悩みもあったり、館種や分野は異なっても、係内での情報共有やスキルの継承などの課題は同じなのだなと感じました。

3. 専門知識はどこまで必要なのか

・著作権に関すること
・ハゲタカジャーナルに関すること
・雑誌の略称について

といった質問は自分のグループ以外の報告でも内容に挙げられており、図書館に関係が深い部分やEJやDBの使い方など、よく聞かれる資料についての知識は備えておいた方が良いと感じました。

ただ、教員の専門分野に関する質問であったり、全ての分野の専門的な質問について、対面ですぐ回答できる知識を持つことは可能でしょうか。

あるときは化学の構造式を持ってこられて、理論的に正しいかを確認したいと相談されたり、またあるときはその場で歌を歌われて、その曲の収録されているCDがあるかとの質問があったり…。これらは分科会で聞いて私だったらその場ですぐ回答することはできない！と思った事例ですが、化学式や曲については、ちょうどその場に居合わせた先生や、カウンターの担当者に知識があってすぐ解決ができたそうです。

4. 情報の共有とスキルの継承

みなさんの所属機関では、レファレンススキルやレファレンス事例の共有をどのように行っていますか？

・経験で引き継いでいることが多い
・レファレンス事例を蓄積している
・学内資料/学外資料と分け共有フォルダに保存している
・過去の事例集をみてブラッシュアップ
・担当で集まって事例を調べたり、解決に困った質問を他キャンパスの人と集まって事例報告を行ったり
・Excel形式で事例を残している
・回答の事例（メール・FAX）は残している
・レファレンス協同データベースの活用

…など、何らかの形で事例の蓄積している所は多いように感じました。ただ、共有は大切だという意識はありながら、纏める時間が中々とれない、システムや掲示板、レファレンス協同データベースに登録するには質の担保を課題に感じているという話もでていました。

レファレンス協同データベースに事例を掲載するのはハードルが高い、ということに対し、“自館のみ参照”での登録も可能なのでその館での情報共有としての使い方もできますよといったアドバイスもあり、勉強になりました。

5. おわりに

普段の業務では今までの慣例で行っていたことが、他機関だと別のやり方があることを知ることができたり、同じ悩みを知ってなんとなく安心感を得たりと、期待していた通りの有意義な時間となりました。数年で担当が変わることもあり、利用者が期待している（かもしれない）“聞いたらすぐ適切な回答を返してくれる司書さん”は難しいかもしれませんが、利用者と情報を適切に結びつけられるように、様々なレファレンスツールや過去の事例、最新の学術の動向などへの知識を深めていきたいと改めて感じた分科会でした。

（込山祐佳里／こみやま・ゆかり／
広島大学中央図書館）

シンポジウム

「学生協働の現在」

2024年9月22日（日）　13:30-16:00

登壇者　青柳有紗（山梨英和大学附属図書館）
井上真美（皇學館大学附属図書館）
司会・コーディネーター　和知　剛（郡山女子大学短期大学部地域創生学科）

1. 概要

「大学図書館におけるトレンドにもなっていた「学生協働」であるが、2020年に始まった新型コロナウィルス禍」[1] がきっかけで活動を中止せざるを得なくなった事例として、郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部図書館、活動を継続している事例として、山梨英和大学附属図書館 皇學館大学附属図書館の事例報告の後、質疑応答及び意見交換を行った。

2. 山梨英和大学附属図書館　学生協働サークルLIKEの事例

「図書館（Library）と仕事（Work）を英語にして組み合わせ、利用者の方々に本を好き（Like）になって欲しい、という意味」[2] をこめて「LIKE」と名付けられた学生協働サークルは、2009年夏に開催された都内の他大学図書館の見学会で刺激を受けた学生により図書館内で活動するサークルとして2009年秋に設立された。

2019年度までは「職場体験」を主とし、カウンター業務（貸出・返却対応）体験、新着資料の受入作業等の一部を体験、企画展示でのPOP作成、紅楓祭（学園祭）でのイベント実施、2017年度にはマスコットキャラクター「らいくん」を作成した。図書館業務の一部分の業務を図書館司書の仕事のすべてだと勘違いする学生が出てきたこと、学生アルバイトとの差別化が図られていないこと、図書館が部室のようになり図書館内の業務に支障がでてきたこと等の問題点を改善しようとしていたところ、新型コロナ禍により活動が一旦停止となった。

有志学生からの要望により活動を再開し、2020年度からは「学生協働サークル」として、「職場体験」活動から「読書推進活動」をメインに、公共図書館との連携等対外的な活動も加えられた。「1. 図書館業務を体験し、図書館司書の仕事への理解を深めること。2. 図書館司書の即戦力となるような経験を積むこと。3. 学内だけでなく、地域に開かれた大学図書館の諸活動を通して、協調性や表現力を養い、自主的に行動すること。」を目的として活動している。

3. 皇學館大学「ふみくら倶楽部」の事例

2015年第17回図書館総合展に参加し刺激を受けた学生と相談を受けた図書館、教員の三者の協働により2016年2月に学生サポーター団体「ふみくら倶楽部」が設立された。学生は図書館での「自己実現」を、図書館は「図書館活性化」をめざし、教員は「図書館外での活動を視野」に入れ、「①学内：展示、②学内：講演会・イベント、③学外：地域貢献 ④学外：発信、交流」を活動の4つの柱として活動している。

図書館員と「ふみくら倶楽部」との関係の特徴は、学生による自主的な活動を促進するため、「密着しすぎない距離感」[3] を保っているという点であろう。また教員が積極的に関与し、学外における活動のサポートも行っている。伊勢河崎一箱古本市、ウィキペディアタウン伊勢、伊勢うどんトークライブ、ブッ

クピクニック、出版社トークライブ、学生協働フェスタin東海、全国学生協働サミット等学外での活動も活発に行われている。

注目すべき点は2020年4月という新型コロナ禍で行動制限が行われている時期に「ふみくら倶楽部」が大学公認の団体となった点である。新型コロナ禍のために計画されていたイベントは中止となったが、新型コロナ禍で制限されていたことにより逆に図書館の重要性を再認識し、noteを活用した「毎日書評」の活動をつづけることより、ポストコロナの「ふみくら倶楽部」の活動につながっている。

4. 郡山女子大学図書館　図書館応援団「天壇青」の事例

2012年6月より活動を開始した図書館応援団「天壇青」は2012年4月から募集が開始され、図書館展示や学園祭での展示などの活動を行っていた。新型コロナ禍により活動が難しくなり、結果的に図書館応援団「天壇青」としての活動終了となったが、郡山女子大学図書館では全国大学ビブリオバトル予選会、学生選書ツアーなどの学生協働活動が行われている。

5. 考察（私見）

新型コロナ禍を境に活動内容を変更し、学外に向けた活動が活発になった山梨英和大学、および一時的にイベント等の中止があったものの、新型コロナ禍前より続けていた活動を継続することで、活発に活動している皇學館大学と、活動に陰りがみえてきた大学との差はどこにあるだろうか。前者2例とも有志学生からの要望により活動が始まったこと、学外活動に目を向けている点などが特徴的である。また、山梨英和大学では「企画ごとにグループをつくり、その中でリーダーを決めて活動」皇學館大学では部長をおき、教職員は学生のサポートをするという立場をとっている点もポイントであろう。

なお、2024年11月5日から横浜で行われた図書館総合展のポスターセッションで「ふみくら倶楽部」の学生さんとお話する機会があった。「先輩たちがつなげてくれた活動を絶やすことなく、後輩につなげたい。義務や責任感からではなく、自分たちも活動していて楽しいから。」という言葉が印象的であった。

6. おわりに

新型コロナ禍の有無にかかわらず、可能だったことが可能になることの喜びや、「達成感」が学生の動機づけになり、学生協働活動が活発していることは明白である。学生協働活動に参加し、新しいことを経験する喜びを味わえる機会を学生に提供するために、我々は情報収集に努めるべきであろう。今回このような機会を作ってくださった関係者の皆様に深く感謝申し上げる。

注・参考文献

1）大学図書館研究会第55回全国大会予稿集2024
2）学生活動 / 学生協働サークルLIKE https://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/guide/like/（参照2024-11-2）
3）岡野裕行，井上真美，三木彩花「《現場からの提言》学生協働の取り組みは学生・職員・教員の間でどのように違って見えているのか：皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部の4年間を事例として」『図書館界』第71巻5号，2020年，p.288-293. https://doi.org/10.20628/toshokankai.71.5_288（参照 2024-11-2）
4）皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部 https://2020.libraryfair.jp/student_summit/2020/2（参照 2024-11-2）

（加川みどり／かがわ・みどり／
神戸松蔭女子学院大学）

ウェルカムガイダンス

第1回
日時：9月21日（土）9:30 ～ 9:45
参加者数：16名

第2回
日時：9月22日（日）9:30 ～ 9:45
参加者数：17名

内容：

今大会では、1日目および2日目のそれぞれ9:30 ～ 9:45に、全国大会初参加者を対象にしたウェルカムガイダンスを実施した。2日間のうちいずれか1日のみの参加者も参加できるよう、2回開催したが、いずれも同様の内容を説明した。

まず、入会案内を基に「地域グループ」や「研究グループ」といったグループ活動、出版物、入会方法と会員特典や年会費等の大学図書館研究会の概要について説明を行い、この機会の入会の検討を呼び掛けた。

次に、ここ数年の全国大会の開催方式と今大会の概要を案内した。大会のスケジュールと、それぞれの接続先URLについては事前のメールを参照してほしい旨を説明した。また、今大会に於いては1日目の午前中に会員総会が、2日目の昼休憩中に協賛企業によるプレゼンテーションが予定されていたため、そちらへの参加も呼びかけた。

最後に事務連絡を行った。大会期間中は事務局Zoomで常時担当者に相談できることを伝えるとともに、各プログラムの最中でも不明点があれば水色の実行委員会背景画像をセットしているスタッフにチャット等でお声がけいただいて構わないと案内した。また、事前配布したマニュアルにも記載していたが、オンライン参加時のルールとして、以下の4点などを連絡した。

①音声・チャットのいずれも発言時には名前と所属を伝える
②発言しないときにはミュートする
③豊かなコミュニケーションのためにできるだけカメラをONにしてリアクションを大きく多くしてほしい
④表示名を申込時の氏名にしてほしい

質問を受け付ける時間も用意したが、2回とも質問はなかった。

（澤木恵／さわき・めぐみ／信州大学）

協賛企業プレゼンテーション

1. 協賛企業プレゼンテーションについて

協賛企業からのプレゼンテーションでは、EBSCO Information Services Japan株式会社とiJapan株式会社の2社がそれぞれのサービスを紹介しました。

1.1 「最新シングルサインオン -Open Athens-」（EBSCO Information Services Japan株式会社　山下大輔氏）

EBSCO社の「Open Athens」は、図書館の資料に対するシングルサインオン（SSO）アクセスを提供するサービスです。このサービスにより、ユーザーは一度の認証で多様なリソースにアクセスでき、複数のパスワードを管理する手間が省けます。さらに、SAML認証とProxy IPを組み合わせることで、ユーザー属性に基づいた権限設定が可能となり、特定のユーザーグループに必要な情報のみを提供することができます。「Open Athens」は60カ国以上で導入されており、国際的に高い信頼を得ているサービスです。

1.2 「電子ジャーナル契約のためのエクスチェンジャー：Unsubとその利活用のためのコンサルテーション」（iJapan株式会社尾城孝一氏・笠間和喜氏）

iJapan社の「Unsub.org」（以下Unsub）は、電子ジャーナル契約に特化したサービスで、急増するオープンアクセス（OA）論文に対応しています。利用統計を基にフルテキストアクセスに必要な論文数を視覚化し、効率的なリソース管理を実現します。

APC（論文掲載料）コストの上昇や転換契約の見直しに備え、Unsubを活用することでデータに基づいた交渉が可能になり、コスト対効果の分析や有利な契約条件の根拠を提供します。また、UniBio Pressとの提携により、専門家によるコンサルティングサービスも提供し、最適なジャーナル選定を支援します。

2. 当日の状況

2.1　進行と役割の分担

当日は、事前に配布された進行表に従い、円滑に進行しました。開始前に担当者が集まり、全体の流れと役割分担を確認しました。最初にEBSCO社が画面共有を通じてプレゼンテーションを行い、その後iJapan社が事前に提出された動画を担当者が再生しました。動画再生に関しては、画面共有や音声の流れについて簡単なテストを行いましたが、参加者入場前の短時間での確認だったため、Zoomの設定や視聴者の見え方のチェックが不十分でした。この点については、もっと余裕を持ったリハーサルを実施し、事前確認を徹底する必要があったと反省しています。

2.2　質疑応答

それぞれのプレゼンテーションが終了した後、発表内容に関する活発な質疑応答が行われましたが、質問が途切れる場面も見受けられました。私自身、資料を十分に読み込まず、質問の準備が不十分だったため、適切な質問をすることができず、他の担当者に頼りきりになってしまったことが残念です。質疑応答は貴重な意見交換の場であるため、発表内容をしっかりと理解し、参加者の意見や質問を引き出す工夫があれば良かったと感じました。

3. 謝辞

本大会には、プレゼンテーションを行った2社を含む合計17社の協賛企業が参加し、盛況のうちに終了いたしました。心より感謝申し上げます。

特に、プレゼンテーションを行った2社の発表は、参加者のアンケート結果からも高く評価され、新たな知見を得る貴重な機会となりました。昼食後にリラックスしながらオンラインで知識を深めるには、非常に適した内容だったと考えます。また、新たな試みとして、待機時間中に協賛企業のプロモーション資料をスライドショー形式で流すことができたのは、参加者にとって新鮮な体験となったことでしょう。

オンラインでの企業展示は、対面での交流とは異なり、参加者との直接的なコミュニケーションが難しいため、限られた活動しか行えないという課題があります。しかし、このような状況下でも、大会の内容をより充実させるためには、企業の皆様のご協力が不可欠です。改めて、協賛企業の皆様に感謝の意を表し、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（諏訪有香／すわ・ゆか／
高知学園大学高知学園短期大学図書館）

自主企画

「図書館こぼれ話。見てたドラマに図書館が出てきた！」

加藤　晃一

今年度前半のNHK連続テレビ小説『虎に翼』はメディアでも面白いと評判でしたが、本当に面白くて私も最後まで楽しませてもら

いました。ドラマ前半はヒロインである猪爪寅子（いのつめ・ともこ）が明律大学女子部から本科に学ぶ中、閲覧室で課題に取り組む図書館シーンが数回登場、ドラマにあった学生新聞の記事からモデルとなった明治大学の図書館史とリンクするシーンもあり「大学図書館史分科会」でも紹介したのですが、本作の作者である吉田恵里香は図書館が好きなのか、その後も図書館が関連するシーンが何度か登場しました。それと並行して『ギークス～警察署の変人たち～』（フジテレビ）というドラマも楽しんでいて、こちらにも公民館図書室シーンが登場するエピソードがありラストのクレジットを見るとロケ先に「東京経営短期大学」とありましたので、調べたところ、その短大の図書館とほぼ特定されたことなどから、この二つのドラマの図書館シーンについて紹介させていただきました。自主企画ということで気楽に図書館の話が出来れば、と企画しましたが、どれだけお楽しみいただけたのか、ライブ独特の反応がないので気になっています。

（加藤晃一／かとう・こういち／
千葉大学附属図書館）

第55回全国大会 協賛企業・団体一覧

第55回全国大会開催にあたり、以下の企業・団体様からご協賛をいただきました（法人格を除いたアルファベット/50音順）。

ここに深く感謝申し上げます。

EBSCO Information Services Japan株式会社
特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会
株式会社カルチャー・ジャパン
株式会社規文堂
株式会社シー・エム・エス
株式会社タック・ポート
日外アソシエーツ株式会社
日本ファイリング株式会社
ユサコ株式会社
iJpapan株式会社
株式会社カーリル
株式会社紀伊國屋書店
株式会社サンメディア
株式会社樹村房
株式会社ネットアドバンス
日本事務器株式会社
丸善雄松堂株式会社

大学図書館研究会 第55回全国大会
会員総会資料

目　次

【第1号議案】第54期（2023/2024年度）活動報告
1. 活動日誌
2. 地域グループ報告
3. 研究グループ報告
4. 常任委員会等
5. 常任委員会等の活動報告

【第2号議案】第54期（2023/2024年度）決算報告・会計監査報告
1. 2023/2024年度一般財政決算報告
2. 2023/2024年度大会基金決算報告
3. 2023/2024年度出版財政決算報告
4. 2023/2024年度五十周年事業基金報告
5. 2023/2024年度会計監査報告

【第3号議案】第55期（2024/2025年度）活動計画案

【第4号議案】第55期（2024/2025年度）予算案
1. 2024/2025年度一般財政予算案
2. 2024/2025年度五十周年事業基金予算案

【第5号議案】第55期（2024/2025年度）役員案

※この資料では、以下の省略形を用いる。

正式名称	省略形
大学図書館研究会	大図研
大学図書館研究会報『大学の図書館』	会報
大学図書館研究会誌	会誌

【第1号議案】
第54期（2023/2024年度）活動報告

全国委員会、常任委員会、会計監査は、特記以外全てオンライン（Zoom）で実施した。

1. 活動日誌

〔2023年〕
7月30日（日）
　2022/2023年度 第10回常任委員会
　会計監査
8月8日（火）
　会報2023年6月号・7月号発送
9月16日（土）
　2021/2022年度 第6回全国委員会
9月17日（土）-9月19日（月祝）
　第54回全国大会
9月16日（土）
　第1回全国委員会
9月30日（土）
　会報2023年8月号・9月号発送
10月14日（土）
　第1回常任委員会
11月25日（土）
　第2回常任委員会
12月9日（日）
　第3回常任委員会
12月14日（木）
　会報2023年10月号・11月号発送
12月24日（日）
　第2回全国委員会
12月25日（月）
　会誌48号刊行
〔2024年〕
1月21日（日）-1月28日（日）
　第4回常任委員会
　　メール審議
2月8日（木）
　会報2023年12月号発送
2月25日（日）-3月3日（日）
　会報2023年1月号発送
　第5回常任委員会
　　メール審議
3月2日（土）
　会報2024年1月号・2月号発送
3月20日（水）
　第6回常任委員会
3月24日（日）
　第3回全国委員会
4月3日（水）
　会報2024年3月号発送
4月13日（土）-21日（日）
　第7回常任委員会
　　メール審議
4月27日（土）
　会報2023年4月号発送
5月18日（土）
　第8回常任委員会
5月30日（木）
　会報2024年5月号発送
6月23日（日）-6月29日（土）
　第9回常任委員会
　　メール審議

2. 地域グループ報告

各項目の説明は以下のとおり。

① 2024年6月30日現在の会員数
② 運営体制
③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
④ グループ報の発行
⑤ 最近の総会等の報告
⑥ その他、特記事項

2.1 北海道地域グループ

① 2024年6月30日現在の会員数 12名

②　運営体制

グループ長　磯本 善男（放送大学）
全国委員　小林 泰名（北海道大学）
会　　計　磯本 善男（放送大学）

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　　称　2023/2024年度第1回例会
日　　時　2023年9月10日（日）
　　13:00-15:15
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　● 全国委員会報告
　　● 会報特集号編集について
　　● 新入会員について
　　● 5分プレゼン
参加者数　6名

名　　称　2023/2024年度第2回例会
日　　時　2023年11月19日（日）
　　13:30-14:45
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　● 会報2月号について
　　● 5分プレゼン
参加者数　3名

名　　称　2023/2024年度第3回例会
日　　時　2024年3月17日（日）
　　14:00-16:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　● 全国委員会報告
　　● 会報2月号振り返り
　　● 今後の活動について
　　● 5分プレゼン
参加者数　4名

名　　称　2023/2024年度第4回定例会
日　　時　2023年6月30日（日）
　　14:00-15:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　● 全国委員会報告
　　● 今後の活動について
　　● 5分プレゼン
参加者数　5名

④　グループ報の発行 なし
⑤　最近の総会等の報告 なし
⑥　その他、特記事項 なし

2.2　千葉地域グループ

①　2024年6月30日現在の会員数 12名
②　運営体制

地域グループの長　鈴木 宏子
全国委員　加藤 晃一（千葉大学）
会　　計　内山 光子
広　　報　内山 光子
研　　究　牛島 千穂（東京藝術大学）

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　　称　関東地域グループ合同例会
日　　時　2024年2月4日（日）
　　13:30-15:00
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　中野 ひかる氏（関西学院千里国際中等部・高等部図書館司書教諭、大阪成蹊短期大学・相愛大学非常勤講師）
内　　容　アメリカの総合大学の目録部門（カタロギング・デパートメント）について
　　～フロリダ大学を例に～
参加者数　39名
備　　考　千葉・東京地域グループ共催

名　　称　図書館見学会
日　　時　2024年6月29日（土）
　　14:00-17:00
会　　場　放送大学附属図書館
参加者数　5名

④　グループ報の発行

回　　数　1回
巻　　号　51号
発行月日　2023年7月10日

⑤　最近の総会等の報告 なし

⑥　その他、特記事項 なし

2.3　東京地域グループ

①　2024年6月30日現在の会員数 79名

②　運営体制

地域グループの長　山口 友里子
全国委員　下山 朋幸
運営委員　小林 和実
下城 陽介
松原 恵
オブザーバ　立原 ゆり
林 恵理

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　称　第1回情報交換会
日　時　2023年11月19日（日）
10:30-11:30
会　場　オンライン（Zoom）
内　容　全国大会参加報告会
参加者数　16名

名　称　関東地域グループ合同例会
日　時　2024年2月4日（日）
13:30-15:00
会　場　オンライン（Zoom）
講　師　中野 ひかる氏（関西学院千里国際中等部・高等部図書館司書教諭、大阪成蹊短期大学・相愛大学非常勤講師）
内　容　アメリカの総合大学の目録部門（カタロギング・デパートメント）について
～フロリダ大学を例に～
参加者数　39名
備　考
- 千葉・東京地域グループ共催
- 終了後、地域グループ臨時総会を実施

名　称　第1回東京地域グループ例会「東洋文庫ミュージアム見学会」
日　時　2024年6月2日（日）
10:30-11:25
会　場　東洋文庫ミュージアム
参加者数　9名

④　グループ報の発行

回　数　4回
巻　号　260号-263号
発行月日　2023年11月-2024年6月

⑤　最近の総会等の報告

名　称　東京地域グループ総会
日　時　2023年7月22日（土）
10:15-11:15
会　場　銀座ルノアール貸会議室マイスペース 新宿3丁目ビックスビル店7号室
参加者数　10名
内　容
- 活動総括、2022/2023年度決算報告・会計監査報告
- 活動方針、2023/2024年度予算案、2023/2024年度地域グループ運営委員会及び会計監査人について

備　考　終了後、情報交換会を開催

名　称　東京地域グループ臨時総会
日　時　2024年2月4日（日）
15:15-16:00
会　場　オンライン（Zoom）
参加者数　10名
内　容　地域グループ活動費の値下げを決定した。2024/2025年度より年間1,500円から1,000円へ値下げする。
備　考　同日開催の関東地域グループ合同例会に続けて開催

⑥　その他、特記事項

- 会報『大学の図書館』2024年5月号の特集企画「デジタル・アーカイブの”身近な”現在地」の編集を担当した。

2.4　東海地域グループ

①　2024年6月30日現在の会員数 19名

②　運営体制

地域グループ長　中村 直美
全　国　委　員　中川 恵理子
運　営　委　員　松野 高徳
　　小山 荘太郎

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　　称　東海地域グループ 春の交流会
日　　時　2024年5月26日（日）
　　14:00-17:00
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　佐藤 正惠氏（千葉県済生会習志野病院図書室）
内　　容　「世界の図書館員とキャリア形成―Think globally, act locally!」
参加者数　20名
備　　考　講演会後、交流会を行った

④　グループ報の発行 なし

回　　数　1回
巻　　号　217号
発行月日　2024年4月1日

⑤　最近の総会等の報告 なし

⑥　その他、特記事項 なし

2.5　京都地域グループ

①　2024年6月30日現在の会員数 49名

②　運営体制

グループ代表　長坂 和茂
全 国 委 員　山上 朋宏
運 営 担 当　安東 正玄
　　内田 栞
　　坂本 拓
　　野間口 真裕
　　原 健治
　　山下 ユミ
　　若狭 あや

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　　称　大図研京都ワンディセミナー「大学図書館と生成AIについて考える」
日　　時　2023年7月22日（土）
　　14:00-16:30
会　　場　キャンパスプラザ京都 6F 第1講習会室
講　　師　吉本 龍司氏（株式会社カーリル 代表取締役）
内　　容　現在のChatGPTの手ごたえと今後の可能性、図書館を取り巻く利用者環境の変化と図書館がすべきサービスの高度化などについて語っていただいた。
参加者数　36名
備　　考　会員はZoom参加可能

名　　称　関西3地域グループ合同例会「ネットで探せない『書誌の書誌』の書籍化の裏話」
日　　時　2024年1月27日（土）
　　13:30-16:00
会　　場　キャンパスプラザ京都 6F 第1講習会室
講　　師　伊藤 民雄氏（実践女子大学図書館）
内　　容　2023年6月に日本図書館協会から『探すツール －図書館、出版、メディア　書誌の書誌』を刊行した実践女子大学図書館の伊藤民雄氏を講師に迎え、出版までの当然苦労話や新しい発見についてお話しいただいた。
参加者数　24名
備　　考
- 京都・大阪・兵庫地域グループ共催
- 会員はZoom参加可能

名　　称　大図研京都ワンディセミナー「京都大学　桂図書館見学！」
日　　時　2024年5月18日（土）
　　14:00-15:30

会　　場　京都大学桂図書館
講　　師　長坂 和茂氏（京都大学元桂図書館職員）
内　　容　京都大学桂図書館の開館に携わった長坂和茂氏から図書館の機能について説明してもらった後に、館内ツアーを実施した。
参加者数　12名

④　グループ報の発行
回　　数　5回
巻　　号　352-358
発行月日　2023年7月14日－2024年5月4日

⑤　最近の総会等の報告
名　　称　2023/2024年度臨時総会
日　　時　2024年2月1日（木）19:30-20:30
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　地域グループ費を年額2000円から0円に変更する京都地域グループ規約の改定と、2022/2023年度決算の修正を審議し、両方とも承認された
参加者数　11名

⑥　その他、特記事項
臨時グループ総会で京都地域グループ規約の改定が承認されたことにより、2024/2025年度から地域グループ費を年額0円とすることになった。

2.6　大阪地域グループ

①　2024年6月30日現在の会員数 29名

②　運営体制
地域グループの長　小村 愛美
全国委員　吉田 弥生
事務局　伊賀 由紀子
会計　吉田 弥生
地域グループ委員　小山 荘太郎

③　例会・研究会・見学会等の活動報告
名　　称　関西3地域グループ合同例会「ネットで探せない『書誌の書誌』の書籍化の裏話」
日　　時　2024年1月27日（土）13:30-16:00
会　　場　キャンパスプラザ京都 6F 第1講習会室
講　　師　伊藤 民雄氏（実践女子大学図書館）
内　　容　2023年6月に日本図書館協会から『探すツール －図書館、出版、メディア　書誌の書誌』を刊行した実践女子大学図書館の伊藤民雄氏を講師に迎え、出版までの当然苦労話や新しい発見についてお話しいただいた。
参加者数　24名
備　　考　● 京都・大阪・兵庫地域グループ共催
● 会員はZoom参加可能

名　　称　5月例会「第54回全国大会報告会」
日　　時　2024年5月25日（日）14:00-17:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　第54回全国大会について、いくつかのプログラムを取り上げ、報告いただいた。
参加者数　10名

④　グループ報の発行
回　　数　1回
巻　　号　No. 8
発行月日　2023年8月19日

⑤　最近の総会等の報告
名　　称　第8回地域グループ総会
日　　時　2023年8月27日（日）15:00-16:00
会　　場　オンライン（Zoom）
参加者数　5名（この他に委任状7名）
内　　容　● 2022年度活動報告、決算報

告・監査報告

- 2023年度役員案および活動方針案、予算案についての協議

⑥　その他、特記事項

第54回全国大会の開催地として、全国大会実行委員会に複数のメンバーが参画して大会運営に協力した。

2.7　兵庫地域グループ

①　2024年6月30日現在の会員数 19名

②　運営体制

地域グループ長　六車 彩都子
全　国　委　員　德田 恵里
事　　務　　局　花崎 佳代子
財　政　部　長　井上 俊子
編　集　部　長　有馬 良一
会　計　監　査　杉原 奈美

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　　称　関西3地域グループ合同例会「ネットで探せない『書誌の書誌』の書籍化の裏話」
日　　時　2024年1月27日（土）13:30-16:00
会　　場　キャンパスプラザ京都 6F 第1講習会室
講　　師　伊藤 民雄氏（実践女子大学図書館）
内　　容　2023年6月に日本図書館協会から『探すツール －図書館、出版、メディア　書誌の書誌』を刊行した実践女子大学図書館の伊藤民雄氏を講師に迎え、出版までの当然苦労話や新しい発見についてお話しいただいた。
参加者数　24名
備　　考
- 京都・大阪・兵庫地域グループ共催
- 会員はZoom参加可能

名　　称　尼崎市立歴史博物館“あまがさきアーカイブズ”見学会
日　　時　2024年1月28日（日）14:00-17:00
講　　師　辻川 敦氏（尼崎市立歴史博物館/あまがさきアーカイブズ）
会　　場　尼崎市立歴史博物館
内　　容　尼崎市立歴史博物館/あまがさきアーカイブズ（地域研究史料室）を、同館の認証アーキビスト辻川敦氏の案内で見学し、質疑応答を行った。地域資料の扱いや市立図書館との連携など、様々な質問が寄せられた。
参加者数　9名
備　　考　終了後有志で懇親会を開催した。

名　　称　ネット情報・生成系AIにおぼれない学び方
日　　時　2024年3月2日（土）15:00-17:15（懇親会:17:15-19:00）
講　　師　梅澤 貴典氏（中央大学）
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　中央大学の梅澤貴典氏より、著作『ネット情報・生成系AIにおぼれない学び方』をベースに、改めてネット情報、本、データベースの使い方や、利用者教育についてお話しいただいた。質疑応答では、様々な業種の方から質問が寄せられた。
参加者数　最大アクセス35
備　　考　終了後有志で懇親会を開催した。

名　　称　不定期交流会
日　　時　2023年11月1日（水）20:30-22:10

会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　日頃の業務や近況について自由に話し合ったり、意見交換を行ったりした。今後も不定期で開催予定。
参加者数　6名

④　グループ報の発行 なし

⑤　最近の総会等の報告
名　　称　第45回地域グループ大会
日　　時　2023年8月19日（土）
9:30-11:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　決算・予算・役員人事・会報・グループの活動方針等について、検討を行った。
参加者数　9名
備　　考　終了後交流会を実施した。

⑥　その他、特記事項
兵庫地域グループMLにて情報交換、イベント案内などを随時行った。

2.8　広島地域グループ

①　2024年6月30日現在の会員数 18名

②　運営体制
地域グループ長　沖政 裕治（広島大学）
全国委員　諏訪 有香（高知学園大学高知学園短期大学）
事務局長　沖政 裕治（広島大学）
事務局員　山下 真佑美（広島商船高等専門学校）
会計　山下 真佑美（広島商船高等専門学校）
会計監査　込山 祐佳里（広島大学）
編集長　石井 美絵（広島文教大学）
編集委員　片山 智恵美（広島都市学園大学）
北井 由香（島根県立大学）
込山 祐佳里（広島大学）
永友 恵（広島大学）

③　例会・研究会・見学会等の活動報告
名　　称　研究会「図書館システム（その2）」
日　　時　2023年7月29日（土）
11:00-12:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　事例発表
参加者数　9名
備　　考　総会後に開催

名　　称　研究会「図書館報」
日　　時　2023年12月17日（日）
10:00-12:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　事例発表
参加者数　7名

名　　称　研究会「図書館資料の除籍」
日　　時　2024年5月19日（日）
10:00-12:00
講　　師　山下 真佑美氏（広島商船高等専門学校）
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　事例発表
参加者数　7名

④　グループ報の発行
回　　数　5回
巻　　号　236号-240号
（電子版No. 47-51）
発行月日　2023年7月1日、2023年9月1日、2023年12月1日、2024年4月25日、2024年6月30日

⑤　最近の総会等の報告
名　　称　2023/2024年度広島地域グループ総会
日　　時　2023年7月29日（土）
10:00-11:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　●　会計報告

- 会員現況
- 活動報告
- 役員選出
- 次期活動計画など

参加者数　9名

⑥　その他、特記事項 なし

2.9　九州地域グループ

①　2024年6月30日現在の会員数 34名

②　運営体制

地域グループ長　金子 芙弥
全国委員　柿原 友紀
事務局　坂本 里栄
会計　川﨑 陽奈
企画サポーター　小野 未来子
川﨑 陽奈
坂本 里栄
山下 大輔
会報編集　平山 紀子
会計監査　西村 泰成

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　称　8月例会
日　時　2023年8月19日（土）
15:00-17:10
会　場　オンライン（Zoom）
内　容　情報交換会
参加者数　5名

名　称　10月例会
日　時　2023年10月22日（日）
10:00-13:00
会　場　オンライン（Zoom）
内　容　全国大会参加報告
参加者数　6名（うち非会員1名）

名　称　11月例会
日　時　2023年11月18日（土）
15:00-16:50
会　場　オンライン（Zoom）
内　容　情報交換会
参加者数　7名

名　称　12月例会
日　時　2023年12月17日（日）
15:00-17:00
会　場　LINCRASウ―ブル博多
内　容　図書館利用者教育についての意見交換
参加者数　6名（うち非会員1名）
備　考　終了後、懇親会を実施

④　グループ報の発行 なし

⑤　最近の総会等の報告

名　称　地域グループ総会
日　時　2023年7月29日（土）
15:00-16:50
会　場　オンライン（Zoom）
内　容
- 2022/2023年度 決算報告 / 活動報告 / 組織報告
- 2023/2024年度 役員改選 / 活動方針・活動計画案 / 予算案
- その他

参加者数　15名（この他に委任状14名）

⑥　その他、特記事項

「大学の図書館」2024年7月号の特集編集を担当した。

3. 研究グループ報告

各項目の説明は以下のとおり。

①　2024年6月30日現在の会員数
②　運営体制
③　例会・研究会・見学会等の活動報告
④　グループ報の発行
⑤　最近の総会等の報告
⑥　その他、特記事項

3.1　長期的研究グループ

3.1.1　学術基盤整備研究グループ

①　2024年6月30日現在の会員数 19名

②　運営体制

グループ長　野間口 真裕（京都教育大学）

全国委員　楫 幸子（安田女子大学）

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　　称　データスキル勉強会

日　　時　2023年7月9日（日）
9:00-10:00
同様に7月23日（日）、8月6日（日）、9月10日（日）、10月1日（日）、10月15日（日）、10月29日（日）、11月26日（日）、12月10日（日）、2024年1月7日（日）に開催

会　　場　オンライン（Zoom）

参加人数　毎回4-5名

備　　考　勉強会の題材は以下のとおり。

- Library Carpentry: OpenRefine（https://librarycarpentry.org/lc-open-refine/）

名　　称　オンライン読書会

日　　時　2024年1月21日（日）
9:00-10:00
同様に2月4日（日）、2月18日（日）、3月3日（日）、3月31日（日）、4月21日（日）に開催

会　　場　オンライン（Zoom）

参加人数　毎回4-5名

備　　考　読書会の題材

- CA2055 – 動向レビュー：即時オープンアクセスを巡る動向：グリーンOAを通じた即時OAと権利保持戦略を中心に / 船守美穂（https://current.ndl.go.jp/ca2055）

名　　称　データスキル勉強会

日　　時　2024年5月12日（日）
9:00-10:00
同様に6月2日（日）、6月23日（日）に開催

会　　場　オンライン（Zoom）

参加人数　毎回6-9名

備　　考　勉強会の題材

- Library Carpentry: Python for Librarians（https://librarycarpentry.org/library-python/）

④　グループ報の発行 なし

⑤　最近の総会等の報告

日　　時　2023年7月23日（日）
10:15-11:30

会　　場　オンライン（Zoom）

参加人数　4名

備　　考　活動報告・決算報告。予算案・活動案等について協議した。

⑥　その他、特記事項

- 第54回全国大会にて第6分科会：学術情報基盤「データクレンジングのはじめ方」を担当した。
- 『大学の図書館』2024年4月号の特集企画「OpenRefine」を担当した。

3.2　萌芽的研究グループ

今年度、萌芽的研究グループは設置されなかった。

4.　常任委員会等

常任委員会では、常設の5委員会（全国大会、研究企画、会報編集、会誌編集、広報）、非常設の1委員会（記念出版物編集）、および事務局において会務を行い、各課題に取り組んだ。

各委員会の長は常任委員が務め、主として常任委員で構成される。また、会務をサポートする運営サポート会員を会員から公募する

ことによって、運営の強化を図っている。

常任委員会の構成、各委員会および事務局の活動報告は以下のとおりである。

4.1　常任委員会等の体制

4.1.1　常任委員会

会長（全国委員会委員長）：呑海沙織
副会長：赤澤久弥
全国大会委員会：赤澤、上村順一、中筋知恵[+]、
研究企画委員会：小山荘太郎、有馬良一、呑海、運営サポート会員
会報編集委員会：上村、有馬、北川正路、和知剛、北海道地域グループ*、東京地域グループ*、大阪地域グループ*、兵庫地域グループ*、九州地域グループ*、学術整備基盤研究グループ*
会誌編集委員会：北川、赤澤、有馬、和知、運営サポート会員
広報委員会：中筋[+]、運営サポート会員

4.1.2　五十周年記念事業関連委員会

記念出版物編集委員会：北川、上村、小山、呑海、運営サポート会員

4.1.3　事務局

事務局長：上村
出版担当：赤澤、上村
会計担当：上村、澤木恵[+]
会費徴収担当：渡邊伸彦[+]、赤澤、澤木[+]
組織担当：上村、青山史絵[+]
ML担当：磯本善男[+]

注
1）先頭は、その組織の長
2）初出のみ氏名を記載。初出以外は氏のみ記載
3）＋は、特定常任委員
4）＊は、運営サポート会員
5）＃は、オブザーバ

5. 常任委員会等の活動報告

5.1　常任委員会

5.1.1　全国大会委員会

全国大会委員会は、毎年開催する全国大会の企画・運営を担当している。

第54回全国大会として、2023年9月23日（土・祝）から9月25日（月）の3日間、大阪大学豊中キャンパスを会場に4年ぶりとなるオンサイト形式（一部ハイブリッド形式）で開催した。会員から募った計21名からなる全国大会実行委員会により、大阪地域グループの支援を受け、研究発表、記念講演、交流会、6つの課題別分科会、シンポジウム等のプログラムを実施し、計85名の参加を得た。なお、初の試みとして、会員総会を別日程（2023年9月16日（土）、オンライン形式）で開催したほか、一部のプログラムのオンライン配信を行った。また、17社からの企業協賛を得た。

5.1.2　研究企画委員会

研究企画委員会は、全国大会以外の研究活動を担当している。

①　大図研オープンカレッジ（DOC）

大図研オープンカレッジ（以下、「DOC」という）は大図研の広報および新入会員の獲得を目的として、参加対象を会員に限定しない方針で行っている。昨年度は、企画の体制が整わなかったため、実施することができなかった。

②　グループにかかる申請方法の変更および研究グループの変更

グループ設置の活性化および事務手続きの簡略化を目的として、2024年3月24日（日）に開催された、2023/2024年度第3回全国委員会にて審議され、下記の通り了承された。

- 申請募集時期を、時限募集から随時募集とする。
- グループの継続は、地域グループが自動更新、研究グループが継続の申請が

必要だったところ、研究グループも自動更新とする。

- 地域グループの助成金は、毎年4月末までに申請があった新規グループ、あるいは自動更新されたグループを対象とする。
- グループ活動費は翌年度より会員から徴収するものとする。
- 研究グループは、「長期的研究グループ」と「萌芽的研究グループ」の2種類があったが、「研究グループ」として一本化する。
  - 研究グループは、特定の課題・主題について研究を行う。
  - 助成金額は年間2万円とする。
  - 全国大会・会報・会誌等において活動報告を行う。
  - 申請時に5名以上の会員の参加を必要とし、原則としてグループから全国委員を推薦する。
- 地域グループについては、下記の通りとする。
  - 特定の地域において研究を行う。地域の範囲は問わない。
  - 助成金額は別途定めた助成金区分に従う。
  - 全国大会・会報・会誌等において活動報告を行う。
  - 申請時に5名以上の会員の参加を必要とし、原則としてグループから全国委員を推薦する。

③　研究グループ

前年度に引き続き「学術基盤整備研究グループ」(長期的) が活動を行った。メンバーは各地の会員から構成され、ウェブ上での情報共有や意見交換が主な活動である。昨年度は、2022年9月開催の第54回全国大会の第6分科会（学術基盤整備）で「データクレンジングのはじめ方」を担当するとともに、これと関連して『大学の図書館』第43巻第4号「OpenRefine」の特集企画を行った。

5.1.3　会報編集委員会

会報編集委員会は、会報『大学の図書館』の、各グループによる特集企画のサポート・取りまとめを行い、及びグループが担当しない号の特集企画と編集を行った。

会報は月刊誌として12回の発行を行った。

2023年7月号以降は以下の特集のもと刊行した。

7月号	教員との連携（担当：九州地域グループ）
8月号	地域グループのユニークな取り組み（担当:兵庫地域グループ）
9月号	あれから3年、コロナを今振り返る（担当:京都地域グループ）
10月号	全国大会フラッシュ（担当：会報編集委員会）
11月号	新型コロナウイルス感染症以後の大学図書館業務（担当：大阪地域グループ）
12月号	大学図書館研究会第54回全国大会記録[全国大会記録号]（担当：会報編集委員会）
1月号	2023年・こころを揺さぶられたもの・こと（担当：会報編集委員会）
2月号	世代･経験年数を超えた交流(担当：北海道地域グループ)
3月号	このごろ大学図書館に流行るもの。～dtkMLから拾う～(担当:会報編集委員会)
4月号	OpenRefine（担当：学術基盤整備研究グループ）
5月号	デジタル・アーカイブの”身近な”現在地（担当：東京地域グループ）
6月号	大学図書館研究会第55回全国大会開催要綱[全国大会案内号]（担当：会報編集委員会）

EBSCOへの会報データ提供は、引き続き扱いの保留のままである。

5.1.4　会誌編集委員会

会誌編集委員会は、会誌『大学図書館研究会誌』の編集を担当した。

2023年8月発行の予定であった第48号（2023）を、2023年12月に発行した。第48号からは、冊子体の発行に換えて、即時オープンアクセス出版とした。広報委員会によって、大図研ウェブページ「大図研出版物オープンアクセス」に、会誌公開の項目を追加し、フルテキストの即時公開を実現した。

オープンアクセス化に伴い、投稿規程、執筆要領の見直しを含め、必要となる編集整備の内容を確認したものの、改訂は、次年度への継続課題となった。

なお、第49号（2024）は、締切りを過ぎても投稿がなく、発行できるか不明の状態であり、定期刊行のためには、より積極的な投稿の呼びかけが必要であった。関連して、論文原稿（査読論文）受付再開も次年度への継続課題となった。

5.1.5　広報委員会

広報委員会は、ウェブとSNSによる広報を担当した。

- 大図研ウェブ（https://www.daitoken.com/）による情報発信を引き続き行った。大図研ウェブでは、大図研のイベント案内や会報・会誌の目次情報と記事データベース、全国委員会や常任委員会、研究活動の記録、刊行物案内等を掲載した。
- 大図研ウェブサイトのリニューアルに関わり、データ移行等の作業を行った。
- 会員向けの出版物のデジタル頒布のため、発行の都度、Web上に会報PDFを掲載するとともに、会員への掲載通知を行った。
- 会報は1年間のエンバーゴ終了後、会誌は即時、オープンアクセスとした。
- TwitterやFacebookなどのSNSにて大図研の諸活動の広報を行った。

5.2　五十周年記念事業関連委員会

5.2.1　記念出版物編集委員会

記念出版物の年度内の発行を目標として、「記録資料」、「大図研の活動の振り返り」、「出版物目次一覧」の原稿の準備を進めた。「記録資料」に関しては、各地域グループからの原稿、これまで編集委員会でまとめた原稿を入稿できるようにまとめた。「大図研の活動の振り返り」に関しては、50年間の略年表の作成、各委員長・会長の活動経緯の執筆であり、会報『大学の図書館』のバックナンバーを参照して取り組んだが、完成には至っていない。

5.3　事務局

5.3.1　事務局

①　全国委員会の開催

大図研の運営についての諸決定を行うため、3回の全国委員会を開催した。効率的な運営および経費削減のため、全てオンラインでの会議とした。

②　常任委員会の開催

日常的な業務を遂行するため、ほぼ月に1回、常任委員会を開催した。引き続き、特筆すべき報告事項以外は口頭報告を廃し、審議事項を集中的に議論する形とした。効率的な運営および経費削減のため、全てオンラインもしくはメール審議での会議とした。

③　大図研出版物の作業手順見直し

大図研出版物、特に会報刊行の外部委託化に伴う運用変更を、事務局出版担当と協働して行った。

④　大図研ウェブサーバの運用見直しと移行作業完了

広報委員会並びに事務局ML担当と協働

し、グループ毎にセキュアにコンテンツが制御できる運用方法を検討、その運用が実現できるよう、大図研のウェブサーバの移行作業を行い、完了した。

また、会報等、デジタル化出版物ダウンロード情報を、ID/パスワードを付与した専用ウェブページで公開してきたが、これを大学図書館研究会員専用ページとして衣替えした。ID/パスワードは、従前、はがきによる通知を行って来たが、会員情報交換メーリングリストdtkMLがほぼ全会員登録されるようになったことから、同MLで通知を行うこととした。

各グループに協力を仰ぎ、大図研ウェブページでグループ活動情報の公開を再開した。

⑤　DTKIDの取扱い

会員情報を公開する、会員名簿の在り方について議論し、個々人に付与されているDTKIDと、会員名とを同時に表示しないこととなった。

⑥　会報への「議事要録」の復活掲載

大学図書館研究会の会務を担当している、全国委員会及び常任委員会の「議事要録」を会報に掲載した。以前、会報に掲載されていたが、復活したこととなる。

5.3.2　事務局出版担当

事務局出版担当は、大図研出版部として、大図研出版物（会報・会誌）の団体・個人への販売を行った。

2023年11月より、会報の販売と販売管理に係る当会出版部業務について、マザータンク社への外部委託を開始した。これに伴い、同社には委託前に業務内容を引き渡しの上、委託後は同社からの問い合わせ等に係る確認対応等を行った。なお、2024年6月30日現在の会報の購読者数は、149件154部である。

5.3.3　事務局会計担当

事務局会計担当は、事務局内の各担当と連携して経理業務を行った。

また、フォーム申請を活用し、助成金・研究活動費の支払いに伴う手続きの効率化を図った。

5.3.4　事務局会費徴収担当

事務局会費徴収担当では、会費の収受、納入状況の管理のほか、所定スケジュールに沿って、地域グループへのグループ活動費の送金、次年度会費の納入依頼、未納者や除籍者への督促等を行った。その際、事務局組織担当および事務局会計担当と連携して業務を遂行した。

5.3.5　事務局組織担当

事務局組織担当は、会員の入退会の手続き、会員名簿やメーリングリストの維持・管理を行った。

会員に係る入退会の処理フローに則り、迅速な事務処理、各グループとの正確な情報共有に努めた。

出版物のデジタル頒布については、新規会員およびアクセス情報を紛失した会員宛に郵送での対応を行った。

会員情報に変更があった場合の対応、また新規会員募集について、会報に記事を掲載し周知に努めた。また、会員の入退会やグループ移動等をお知らせする「組織通信」について、長らく掲載を中断していたが、2023年10月号より再開した。

5年ぶりに会員情報調査（会員名簿登載情報の本人確認調査）を実施した。2024年5月半ばに郵送にて調査票を送付し、主にWebフォーム等で回答する形式とした。回答率は約8割で調査を継続中である。

5.3.6　事務局ML担当

事務局ML担当は、ML等の管理を行った。

大図研ウェブサーバ移行作業の協力をした。かねてより懸案となっていた、既に使用されていないML等の整理等を行った。また、ML等の新設、廃止、管理に係る運用の見直しを行った。

【第２号議案】
第54期（2023/2024年度）決算報告・会計監査報告

【凡例】

- 全ての表の単位は「円」である。
- 差引額の「▲」は、マイナスであることを表す。
- 収入の部の「▲」は、予算額に達していない状態であることを示す。
- 支出の部の「▲」は、予算額以上に支出があった状態であることを示す。
- 備考欄の注記は基本的には決算額に対しての説明である。

1．2023/2024年度一般財政決算報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額（決算－予算）	備考
前年度より繰越	7,803,952	7,803,952	0	
会費	1,580,000	1,700,000	▲ 120,000	注[1]
雑収入	15,570	10,000	5,570	注[2]
大会基金より繰入	110,717	0	110,717	
合計	9,510,239	9,513,952	▲ 3,713	

【注】

[1] 6月末時点の累計額、のべ316名分。うち、前納（2024/2025年度以降）分142名、当年度（2023/2024年度）分152名、前年度（2022/2023年度）以前分22名。予算額は会員340名分

[2] 地域グループ助成金過払い分の返金、会費過納付分、受取利子

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額（予算－決算）	備考
印刷費	8,559	20,000	11,441	注[3]
通信費	74,129	250,000	175,871	注[4]
交通費	0	450,000	450,000	注[5]
編集費	8,000	32,000	24,000	注[6]
助成金	205,000	190,000	▲ 15,000	注[7]
研究活動費	20,000	140,000	120,000	注[8]
会議費	22,110	77,000	54,890	注[9]
事務管理費	9,900	21,000	11,100	注[10]
消耗品費	209	10,000	9,791	注[11]
雑費	4,290	30,000	25,710	注[12]
予備費	0	8,293,952	8,293,952	
次年度繰越	9,158,042	0	▲ 9,158,042	
合計	9,510,239	9,513,952	3,713	

【注】

[3] 入会案内、資料送付かがみ、会員情報調査回答票印刷費

[4] 資料等郵送費、会費納入依頼等会員通知郵送費（過納付会費の返金を含む）、大図研webページ関連費用（サーバレンタル費、ドメインネーム費）

[5] 全国委員会、常任委員会、会計監査ともにすべてオンライン開催のため、交通費発生せず

[6] 会報2023年7、9、12月号、2024年5月号非会員執筆者謝礼

[7] 地域グループ会員70名以上52,000円×1（東京）、地域グループ会員69-30名27,000円×2（京都・九州）、地域グループ会員29-20名18,000円×2（大阪・広島）、地域グループ会員19-5名12,000円×4（北海道・千葉・東海・兵庫）。会計担当者の誤認により大阪地域グループ・東海地域グループ宛に過払いが発生、後日返金額を雑収入として受け入れた

[8] 長期的研究グループ20,000円×1

[9] Zoom利用料（年払）

[10] Office365利用料（年払）

[11] 資料等郵送用物品

[12] 銀行口座振込手数料

2. 2023/2024年度大会基金決算報告

100万円を超えた場合は、一般財政へ繰り入れる。

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 （決算－予算）	備考
前年度より繰越	500,000	500,000	0	
一般財政より戻り	610,717	500,000	110,717	注[13]
雑収入	0	0	0	
合計	1,110,717	1,000,000	110,717	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 （予算－決算）	備考
今年度大会会計へ支出	0	0	0	
来年度大会会計へ支出	100,000	350,000	250,000	注[14]
一般財政へ支出	110,717	0	▲ 110,717	
雑費	0	0	0	
次年度繰越	900,000	650,000	▲ 250,000	
合計	1,110,717	1,000,000	▲ 110,717	

【注】

[13] 前年度一般財政より第54回大会（大阪・ハイブリッド）会計へ支出額の返戻（500,000円）、および第54回大会会計黒字分のうち2/3を繰入（110,717円、残り1/3は開催地域である大阪地域グループ会計へ繰入）

[14] 第55回全国大会（オンライン）へ支出

3. 2023/2024年度出版財政決算報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 （決算－予算）	備考
前年度より繰越	3,440,357	3,440,357	0	
刊行物収入	862,200	885,600	▲ 23,400	注[15]
広告料収入	0	0	0	
雑収入	24	0	24	注[16]
合計	4,302,581	4,325,957	▲ 23,376	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 （予算－決算）	備考
印刷費	1,177,495	1,360,000	182,505	注[17]
発送委託費	27,015	33,000	5,985	注[18]
通信費	260,084	320,000	59,916	注[19]
消耗品費	17,417	10,000	▲ 7,417	注[20]
宣伝費	0	10,000	10,000	
会議費	0	0	0	
雑費	5,523	10,000	4,477	注[21]
出版物販売委託費	99,303	150,000	50,697	注[22]
予備費	0	2,432,957	2,432,957	
次年度繰越	2,715,744	0	▲ 2,715,744	
合計	4,302,581	4,325,957	23,376	

【注】

[15] 会報42・43巻
[16] 預金利息
[17] 会報42巻6号-43巻5号、会誌48号製版費
[18] 会報42巻6号-43巻5号
[19] 会報42巻6号-43巻5号、出版部外注連絡はがき送付等
[20] 会報送付OPP袋費、大図研公式封筒作成費、出版部外注連絡はがき印刷費
[21] 振込手数料
[22] 出版部事務委託手数料

4. 2023/2024年度五十周年事業基金報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 （決算－予算）	備考
前年度より繰越	895,514	895,514	0	
雑収入	0	0	0	
合計	895,514	895,514	0	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 （予算－決算）	備考
記念出版物編集委員会	0	895,514	895,514	
海外図書館研修ツアー検討委員会	0	0	0	
次年度繰越	895,514	0	▲ 895,514	
合計	895,514	895,514	0	

5. 2023/2024年度会計監査報告

大学図書館研究会 2023/2024年度 会計監査報告

2023/2024年度一般財政・出版財政に係る決算及び関係書類について監査した結果、いずれも適正に執行されていることを確認しましたので、ご報告いたします。

【監査所見】

会議等のオンライン化によって支出が大幅に縮減されており、当年度は大会が対面で実施されたものの、参加費や協賛金等により黒字運営となったことから、大会を対面で実施した場合においても収入が支出を大きく上回る状況に変わりがないことが確認された。

そのため今後に向けては、会費や大会参加費等の見直しも含め、収支バランスの改善が必要と考えられる。

[一般財政]

会費徴収においては昨年度に引き続き、滞納会費の督促や超過納入者への連絡等、細やかな対応がなされている点は高く評価する。

ただし、依然として一定の割合での会費未納がみられるため、未納・延滞対策についての検討を継続していただきたい。また、会費の超過納入に関する対応が複雑化しており、本人への連絡が取れない場合の取り扱いが定まらないケースが増加しているため、超過納入時の対応方針の策定が必要と考える。

[出版財政]

業務のアウトソーシングにより、運営の効率化と安定性が図られている点は評価できる。しかし、支出が収入を大幅に上回っており、特に会員外の購読機関向けに発行している紙版の印刷・発送・販売委託に多額のコストがかかっているため、紙版の発行方針について早急に検討する必要があると考える。

2024年8月13日

大学図書館研究会会計監査人

伊賀 由紀子

立原 ゆり

【第3号議案】
第55期（2024/2025年度）活動計画案

地域グループ及び研究グループを核として活動を行う。地域グループは、北海道、千葉、東京、東海、京都、大阪、兵庫、広島、九州の9グループで構成される。

研究グループは、学術基盤整備研究グループが活動を継続している。

会費は、前年度に引き続き、一括徴収方式を採る。2016/2017年度より前（支部制）の未徴収会費については引き続き、地域グループが責任をもって徴収する。

1. 常任委員会

常任委員会の運営方法を引き続き検討する。原則として、オンライン会議とする。

試行的に2ヶ月に1回の開催とすることで、委員の負担軽減を図り、また、特定常任委員や運営サポート会員の協力のもと、効率的かつ円滑な運営を心がける。

1.1　全国大会委員会

実行委員会形式で全国大会を企画し運営する。広く会員から実行委員を募ることにより、企画と運営に関わる機会を提供する。また、当会の主要な行事として位置付け、引き続き全国委員会との連携体制を構築しながら、安定した開催と運営ノウハウの継承に努める。

1.2　研究企画委員会

大図研オープンカレッジ（DOC）企画については、地域グループ・研究グループとの共催を含めて運営サポート会員の募集を行い、魅力的な企画運営と安定的な体制づくりを継続する。

地域グループ・研究グループの募集を継続する。オンライン形式での会議や研修会企画などを含めた活動を支援する。

グループにかかるウェブページを見直し、「地域グループ活動」、「研究活動」に分かれて掲載しているウェブページを、「地域グループ活動」を「グループ活動」とした上で一本化する。

また、グループ新設申請の募集を9月および3月の会報に掲載するとともに、同タイミングで、MLおよびSNSで募集する。

1.3　会報編集委員会

① 会報のあり方を特集企画担当者およびグループと引き続き共有する。
② 確実な発行サイクルを堅持でき、かつ毎月25日に確実に刊行出来るよう、引き続き行程を見直す。
③ 会員からの投稿をより積極的に呼び掛ける。
④ 目次情報の正規化に努める。

1.4　会誌編集委員会

『大学図書館研究会誌』が、第48号（2023）から、即時オープンアクセス出版となったことに伴う編集整備を継続する（投稿規程の見直し、著作権規程との整合性の確認、オンライン版ISSNの取得、冊子体納品からオンライン資料収集制度（eデポ）による登録への変更）。

また、定期刊行を実現するため、締切りの前に原稿が集まるように、原稿執筆依頼、投稿呼びかけ等のスケジュールを再考する。あわせて、論文原稿（査読論文）の受付再開に向け、前年度に審議された編集・査読スケジュールの策定のほか、査読マニュアルを作成する。

1.5　広報委員会

引き続き、ウェブサイト、メーリングリストおよびSNSの活用を通じて、大図研の迅速な情報提供に務めるとともに、新会員獲得の一助となる情報の提供を行う。

2. 五十周年記念事業

2.1　記念出版物編集委員会

記念出版物を構成する「記録資料」、「大図研の活動の振り返り」、「出版物目次一覧」の原稿の作成に取り組む。

原稿作成に向けた作業の内容は定まっているので、体制を整え、発行する。

3. 事務局

3.1　事務局

①　全国委員会の開催

大図研の運営についての諸決定を行うため、全4回程度の全国委員会を引き続き開催する。原則としてオンライン開催とする。

②　常任委員会の開催

日常的な業務を遂行するため、引き続き常任委員会を開催する。原則としてオンライン開催とし、審議すべき事項を絞り込み、委員のより一層の負担軽減に務める。

③　大図研出版物の作業手順見直し

引き続き、大図研出版物の製版・印刷・発送作業を見直し、より低コストで省力化が図れるよう、事務局出版担当及び事務局組織担当と協議の上、検討する。

④　大図研会員への勧誘

大図研およびグループが開催する行事に、入会案内を配布する等、積極的に大図研の存在をアピールする。

⑤　会員名簿の掲出

前年度行った会員情報調査を踏まえ、会員名簿を会員専用ウェブページに掲出する。

3.2　事務局出版担当

外部委託先との連絡調整を行いながら、現状の外部委託方式を確立する。また、会報編集委員会および事務局内で連携して業務を遂行する。

3.3　事務局会計担当

引続き、事務局内の各担当と連携し、出版財政、大会基金の繰り込みに伴う処理を含め、業務を適切に遂行する。

さらに、立替払等について早期の申請を促し、予算執行状況を可視化するとともに、伝票類の散逸を防ぎ、業務の合理化および透明化を推進する。

3.4　事務局会費徴収担当

従来の業務フローを確実、適切に実施するとともに、納入率の向上を目指す方策を引き続き検討する。

3.5　事務局組織担当

事務局組織担当業務（会員に係る手続き、会員名簿やメーリングリストの維持・管理、地域および研究グループとの会員情報共有など）を迅速かつ確実に実施する。

会員情報の変更があった場合の対応方法について、会報やメーリングリストで定期的に周知し、会員情報のアップデートに努める。

昨年度実施した会員情報調査の後処理を適切に進める。

3.6　事務局ML担当

引き続き、ML等の安定的な管理・運用に努める。

【第4号議案】
第55期（2024/2025年度）予算案

【凡例】

- 全ての表の単位は「円」である。
- 差引額の「▲」は、マイナスであることを表し、前年度予算額よりも少額である状態であることを示す。

1．2024/2025年度一般財政予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
前年度より繰越	9,157,542	7,803,952	1,353,590	7,803,952	
会費	1,650,000	1,700,000	▲ 50,000	1,580,000	注[1]
刊行物収入	870,000	0	870,000	0	注[2]
全国大会収入	100,000	0	100,000	0	注[3]
雑収入	10,000	10,000	0	15,570	注[4]
出版財政より繰入	2,715,744	0	2,715,744	0	注[5]
大会基金より繰入	900,000	0	900,000	110,717	注[6]
合計	15,403,286	9,513,952	5,889,334	9,509,739	

【注】

[1] 会員330名分で算出
[2] 今年度新設、出版財政より移転。会報『大学の図書館』43・44巻分（機関97部×6,000円、書店52部×5,400円、個人1部×6,000円）
[3] 今年度新設、旧「大会基金」より繰入、第55回全国大会支出金戻り
[4] 全国大会収入、大図研オープンカレッジ参加費
[5] 出版財政次年度繰越より繰入、出版財政の廃止のため今年度限り
[6] 全国大会基金より繰入、全国大会基金の廃止のため今年度限り

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
印刷費	1,360,000	20,000	1,340,000	8,559	注[7]
通信費	690,000	250,000	440,000	74,129	注[8]
会報発送委託費	33,000	0	33,000	0	注[9]
編集費	32,000	32,000	0	8,000	注[10]
全国大会費	500,000	0	500,000	0	注[11]
助成金	184,000	190,000	▲ 6,000	205,000	注[12]
研究活動費	140,000	140,000	0	20,000	注[13]
会議費	67,000	77,000	▲ 10,000	22,110	注[14]
事務管理費	162,000	21,000	141,000	9,900	注[15]
交通費	410,000	450,000	▲ 40,000	0	注[16]
消耗品費	10,000	10,000	0	209	
雑費	10,000	30,000	▲ 20,000	4,290	注[17]
予備費	11,805,286	8,293,952	3,511,334	0	
次年度繰越	0	0	0	9,157,542	
合計	15,403,286	9,513,952	5,889,334	9,509,739	

【注】

[7] 会報印刷費@407×月平均印刷213部×12ヶ月分×消費税1.1、会誌製版費、封筒等印刷費10,000円、会員通知用宛名ラベル印刷費等

[8] 会報発送単価@195×月平均発送156部×12ヶ月分×消費税1.1、印刷残部出版部宛返送単価@1000×12ヶ月分×消費税1.1、各種資料送料、会費納入通知送料等

[9] 今年度新設、宛名ラベル単価@16×月平均発送156部×12ヶ月分×消費税1.1

[10] 非会員会報執筆者への謝礼1,000円×12、外部査読費20,000円

[11] 今年度新設、第56回全国大会準備金

[12] 地域グループ会員70名以上52,000円×1（東京）、地域グループ会員69-30名27,000円×2（京都・九州）、地域グループ会員29-20名18,000円×1（大阪）、地域グループ会員19-5名12,000円×5（北海道・千葉・東海・兵庫・広島）

[13] 研究グループ20,000円×1、講演等テープ起こし30,000円、関東・近畿合同例会テープ起こし20,000円×2、大図研オープンカレッジ関係費20,000円、その他研究活動費等

[14] オンライン会議費2,000円×12ヶ月分、会場費4,000円×3（全国委員会1回＋常任委員会1回＋会計監査1回）、全国大会backlog費、会議予備費

[15] 事務局外注費12,000円、出版物販売委託費150,000円

[16] 全国委員会250,000円×1回、常任委員会40,000円×1回、会計監査120,000円×1回

[17] 会報印刷費・交通費等口座振込手数料等10,000円

2. 2024/2025年度五十周年事業基金予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
前年度より繰越	895,514	895,514	0	895,514	
雑収入	0	0	0	0	
合計	895,514	895,514	0	895,514	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
記念出版物編集委員会	895,514	895,514	0	0	注[18]
次年度繰越	0	0	0	895,514	
合計	895,514	895,514	0	895,514	

【注】
[18] 記念出版物刊行費、会議費等

【第5号議案】
第55期（2024/2025年度）役員案

●全国委員（21名）

項番	氏名	所属	グループ名	委員種別
1	青　山　史　絵	東洋英和女学院大学	東京	常任（特定）
2	赤　澤　久　弥	京都大学	京都	常任
3	有　馬　良　一	神戸大学	兵庫	常任
4	磯　本　善　男	放送大学	北海道	常任（特定）
5	上　村　順　一	琉球大学	東京・学術基盤整備	常任
6	大田原　章　雄	東京藝術大学	千葉	常任（特定）
7	柿　原　友　紀	熊本大学	九州	地域グループ推薦
8	楫　　幸　子	安田女子大学	広島・学術基盤整備	研究グループ推薦
9	加　藤　晃　一	千葉大学	千葉	地域グループ推薦
10	澤　木　　恵	信州大学	東京・学術基盤整備	常任（特定）
11	下　山　朋　幸	（所属先非公開）	東京・学術基盤整備	地域グループ推薦
12	諏　訪　有　香	高知学園大学高知学園短期大学	広島・学術基盤整備	地域グループ推薦
13	徳　田　恵　里	近畿大学	兵庫	地域グループ推薦
14	呑　海　沙　織	筑波大学	無所属	常任
15	中　川　恵理子	金沢学院大学	東海	地域グループ推薦
16	長　坂　和　茂	京都大学	京都・学術基盤整備	地域グループ推薦
17	中　筋　知　恵	小樽商科大学	北海道	地域グループ推薦
18	松　原　　恵	国立情報学研究所	東京	常任（特定）
19	吉　田　弥　生	大阪大学	大阪	地域グループ推薦
20	渡　邊　伸　彦	京都大学	京都	常任（特定）
21	和　知　　剛	郡山女子大学	学術基盤整備	常任

●会計監査（2名）

項番	氏名	所属	グループ名
1	伊　賀　由紀子	大阪公立大学	大阪
2	立　原　ゆ　り	東京大学	東京

第55回全国大会　決算報告

【凡例】
・全ての表の単位は「円」である。
・差引額の「▲」は、マイナスであることを表す。

〈収入の部〉

費目	決算額	決算備考	予算額	予算備考	差引額
参加費	39,084	会員および協賛企業特典参加は無料 @3,000*14名（非会員） ※うち11名分はPeatix手数料@2,706、振込手数料@210の@2,916を控除 @3,000*3名は直接大会口座に振込	82,410	会員無料（要申込） @3,000*30名（非会員） ※Peatix手数料（有料チケット分）：販売実績の4.9%＋99円／枚＋振込手数料210円　として7,590円を控除	-43,326
交流会費	0	オンライン実施のため費用は不要	0	オンライン実施のため費用は不要	0
広告費	210,000	@10,000*14社、@20,000*2社、@30,000*1社	160,000	@10,000*10社、@20,000*3社	50,000
大会基金より繰入	100,000		100,000		0
合計	349,084		342,410		6,674

〈支出の部〉

費目	決算額	決算備考	予算額	予算備考	差引額
会場費	10,556	Zoom Workplace プロライセンス（4ホスト分）1ヶ月分@（2,399+税）	17,300	Zoom Proライセンス（4ホスト分）1ヶ月分@2,125 大規模オプション（1ホスト分）1ヶ月分@8,800	6,744
交流会費	0	Zoomで開催したため不要	0	Zoom以外のサービスを利用した場合はここに計上	0
機器費	0		0		0
印刷費	3,974	会報封入大会チラシ印刷費@2,002、封入費@1,972	4,000	会報封入大会チラシ印刷費	26
オンライン接続準備費用	40,000	シンポジウム講師分として@20,000*2名	75,000	分科会講師分として@5,000*7名 シンポジウム講師分として@20,000*2名	35,000
消耗品費	0		0		0
通信費	84	協賛企業宛書類郵送費用@84*1社	4,000	協賛企業宛書類郵送費用ほか	3,916
予稿集作成費	0	PDF（内製）で発行	30,000	PDFで発行予定（版組を外注した場合の費用）	30,000
実行委員会費	33,858	Backlogスタータープラン（年契約5%割引、2024/07/15-2025/07/14）として@33,858	35,000	実行委員の諸費用 Backlogスタータープラン料金（年払）として@33,858	1,142
予備費	660	振込手数料	77,110	振込手数料はここに含める	76,450
大会基金戻入	100,000	大会基金廃止のため一般財政へ戻入	100,000		0
小計	189,132		342,410		
一般財政繰入	159,952				
合計	349,084				

第55回全国大会 参加申込者名簿（敬称略・五十音順）

アイバ ヨウコ	（無所属）
青柳 有紗	（非会員）
赤澤 久弥	（京都）
有田 真理子	（広島・九州）
有馬 良一	（兵庫）
粟谷 禎子	（北海道）
伊賀 由紀子	（大阪）
池下 綾乃	（非会員）
石井 美絵	（広島）
石立 裕子	（東京）
石村 早紀	（非会員）
磯崎 みつよ	（東京）
磯本 善男	（北海道）
井上 昌彦	（兵庫）
今野 創祐	（京都）
岩井 雅史	（無所属）
上村 順一	（東京・学術基盤整備）
内田 栞	（京都）
大橋 美月	（非会員）
岡田 智佳子	（無所属）
岡本 耕平	（非会員）
岡本 真	（京都）
沖政 裕治	（広島）
小野 未来子	（九州）
小野 亘	（東京）
加川 みどり	（兵庫・学術基盤整備）
柿原 友紀	（九州）
笠間 和喜	（非会員）
楫 幸子	（広島・学術基盤整備）
加藤 晃一	（千葉）
加藤 信哉	（無所属）
金子 芙弥	（九州）
川崎 陽奈	（九州）
岸川 弥生	（非会員）
北川 正路	（東京）
木村 光	（京都）
桑原 博文	（京都）
小池 愛	（非会員）
河野 由香里	（北海道）
小林 明博	（大阪）
小林 泰名	（北海道）
込山 祐佳里	（広島）
小村 愛美	（大阪）
小山 荘太郎	（東海・京都・大阪・兵庫）
佐浦 敬之	（無所属）
坂本 里栄	（九州）
佐藤 知生	（無所属）
佐藤 正惠	（千葉）
佐藤 光子	（非会員）
澤木 恵	（東京・学術基盤整備）
下山 朋幸	（東京・学術基盤整備）
諏訪 有香	（広島・学術基盤整備）
高瀬 洋子	（東京）
棚次 英美	（大阪）
田辺 浩介	（東京・学術基盤整備）
地紙 慎太郎	（北海道）
千田 つばさ	（非会員）
千葉 まこと	（東京）
寺升 夕希	（京都）
德田 恵里	（兵庫）
呑海 沙織	（無所属）
長沖 竜二	（非会員）
中川 恵理子	（東海）
長坂 和茂	（京都・学術基盤整備）
長澤 やよい	（京都・大阪）
長島 利弘	（非会員）
中條 将喜	（北海道）
中筋 知恵	（北海道）
長野 祐子	（東海）
西薗 由依	（九州）
庭井 史絵	（非会員）
野間口 真裕	（京都）
野村 健	（東京）
春名 理史	（非会員）
平山 紀子	（九州）
廣田 桂	（九州）
藤原 叶	（非会員）
古川 真理	（学術基盤整備）

牧田 由江　（無所属）
松川 隆弘　（大阪）
松野 高徳　（東海・学術基盤整備）
松原 恵　（東京）
宮丸 由美子　（九州）
森 敬洋　（京都・広島）
森藤 惠子　（兵庫）
山上 朋宏　（京都）
山口 友里子　（東京）
山下 大輔　（九州）
山下 ユミ　（京都）
山田 翔平　（非会員）
山田 奈々　（京都）
吉田 弥生　（大阪）
吉場 千絵　（無所属）
渡邊 さよ　（広島）
渡邊 伸彦　（京都）
和知 剛　（学術基盤整備）

第55回全国大会 運営役員名簿（敬称略・五十音順）

実行委員長：

加藤　晃一　（千葉地域グループ・千葉大学）

副実行委員長：

赤澤　久弥　（京都地域グループ・京都大学）

事務局長：

上村　順一　（東京地域グループ・学術基盤整備研究グループ・琉球大学）

委員：

相場　洋子　（国際教養大学）
有馬　良一　（兵庫地域グループ・神戸大学）
柿原　友紀　（九州地域グループ・熊本大学）
楫　幸子　（広島地域グループ・学術基盤整備研究グループ・安田女子大学）
北川　正路　（東京地域グループ・東京慈恵会医科大学）
小林　泰名　（北海道地域グループ・北海道大学）
小村　愛美　（大阪地域グループ・大阪大学）
小山　荘太郎（東海・京都・大阪・兵庫地域グループ・横浜国立大学）
澤木　恵（東京地域グループ・学術基盤整備研究グループ・信州大学）
下山　朋幸　（東京地域グループ）
諏訪　有香　（広島地域グループ・高知学園大学高知学園短期大学）
徳田　恵里　（兵庫地域グループ・近畿大学）
中川恵理子　（東海地域グループ・金沢学院大学）
野村　健　（東京地域グループ）
松原　恵　（東京地域グループ・国立情報学研究所）
山上　朋宏　（京都地域グループ・奈良女子大学）
山口友里子　（東京地域グループ・一橋大学）
吉田　弥生　（大阪地域グループ・大阪大学）
渡邊　伸彦　（京都地域グループ・京都大学）
和知　剛　（学術基盤整備研究グループ・郡山女子大学）

第55回全国大会 配付資料

全て、第55回全国大会ウェブページから公開した。敬称略。

- 全体
  - 予稿集
  - 会員総会資料
  - 会員総会資料第5号議案
  - Zoom利用マニュアル
  - 接続URL一覧
  - 参加者名簿
- ウェルカムガイダンス
  - ウェルカムガイダンス[投影資料]
- 研究発表・事例報告
  - [配付資料なし]
- 課題別分科会
  - 第1分科会：資料保存「資料保存における地震対策について」
    - 資料保存における地震対策の経験の共有と継承 / 北川正路
    - 第1分科会事前アンケート集計結果
  - 第2分科会：学術情報基盤「機関リポジトリの表示設定とカスタマイズ」
    - [配付資料なし]
  - 第3分科会：キャリア形成「資格・検定を中心とした自己研鑽について」
    - [配付資料なし]
  - 第4分科会：大学図書館史「大学図書館問題研究会の歴史を見るPart8」
    - [配付資料なし]
  - 第5分科会：出版・流通「学術論文の即時オープンアクセスと図書館」
    - [配付資料なし]
  - 第6分科会：利用者支援「レファレンスで困ったネタを語り合う会」
    - [配付資料なし]
- 協賛企業プレゼンテーション
  - 電子ジャーナル契約のゲームチェンジャー～ Unsub.org及びその利活用のためのコンサルテーション～ /iJapan株式会社 特定非営利活動法人 UniBio Press 尾城孝一
- シンポジウム
  - 事例報告 皇學館大学「ふみくら倶楽部」の場合 / 皇學館大学附属図書館 井上 真美
  - コロナ禍からの学生協働活動 / 山梨英和大学附属図書館 青柳 有紗
  - 郡山女子大学図書館の学生協働（図書館応援団）振り返り / 郡山女子大学短期大学部 和知 剛

大学の図書館　第43巻第12号（No.613）　2024年12月25日（毎月25日発行）　ISSN：0286-6854
編集・発行：大学図書館研究会　年間予約購読料：送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部（出版物購入・問い合わせ窓口）
〒305-0042　茨城県つくば市下広岡410-7　マザータンク気付
E-mail：shuppan@daitoken.com
＜出版物購入代金等振込先＞　三菱UFJ銀行 越谷駅前支店　普通口座：1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局
〒105-0013　東京都港区浜松町2-2-15　浜松町ダイヤビル2F
E-mail：dtk_office@daitoken.com
＜会費振込先＞　ゆうちょ銀行　振替口座：00190-2-79769　大学図書館研究会

議事要録

◆議事の詳細は以下からご覧ください。
https://www.daitoken.com/committee/

2024/2025年度 第2回常任委員会
日時：2024年11月10日（日）10:30-11:30
場所：Zoom
出席者（敬称略）：楫、赤澤、上村（以上、常任委員）、澤木、松原（以上、常任（特定）委員）

2024/2025年度 第3回常任委員会
日時：2024年12月8日（日）10:30-11:30
場所：Zoom
出席者（敬称略）：楫、赤澤、上村、有馬、和知（以上、常任委員）、澤木、松原（以上、常任（特定）委員）

会報『大学の図書館』第43巻第11号（No.612）ノンブル誤付与のお詫び

本会報前号，第43巻第11号（2024年11月号）において，ノンブル（ページ番号）の誤付与がありましたので，お詫びと訂正を申し上げます。

前々号，会報第43巻第10号（2024年10月号）は，174ページで終了しておりますので，前号は175ページから開始されなければならないところ，157ページから開始されてしまっております。

大変恐縮ですが，前号，第43巻第11号（2024年11月号）は，18ページを加算した数を読み変えてくださいますよう，お願い申し上げます。

以後，このようなことが起こらないよう，細心の注意を払って編集を行う所存です。申し訳ございませんでした。

（会報編集委員会）